福岡市埋蔵文化財調査報告書　第534集

MUSHIRODA A O K I

席田青木遺跡 3

―第３次調査の報告―

1997

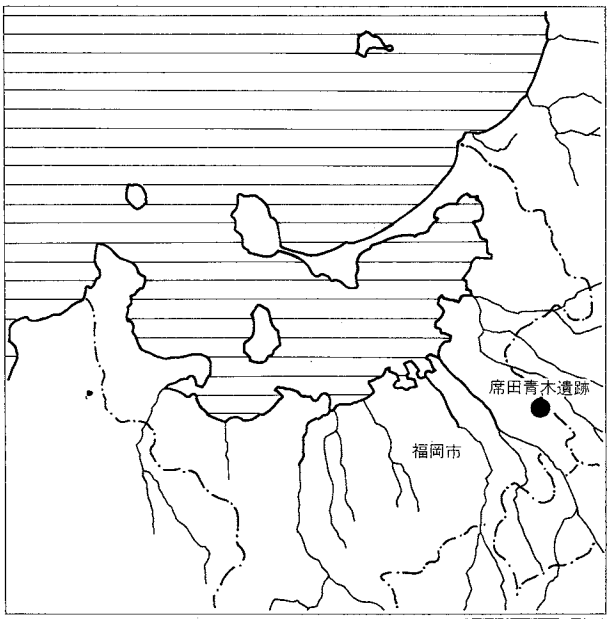
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第534集

MUSHIRODA A O K I

席田青木遺跡　3

―第３次調査の報告―



遺跡調査番号　9521
遺跡略号　　MAK3

1997

福岡市教育委員会

序

福岡市の東を画する月隈丘陵は、弥生時代から古墳時代を中心として、各時代の遺跡が多く分布しています。近年は、地下鉄空港線の開通以来、新たな住宅開発が進んでいますが、この地域は昔から人々の居住に適した土地であったようです。

このたび、共同住宅の開発に先立って、席田青木遺跡の３度目の発掘調査を行いました。その結果、従来想定されていた遺跡の範囲よりも西に広がって、丘陵の斜面から麓に弥生時代から中世までの集落が存在することが分かりました。特に、古墳時代の初め頃の環濠や、古墳時代後期の方形の環溝遺構は注目される所であります。

本書は、これらの調査の成果を収録したものであります。本書が、埋蔵文化財調査に対する市民の方々の御理解、さらには学術研究に寄与することができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、盛立建設株式会社中嶋凡夫氏をはじめ、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成９年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 町　田　英　俊

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成7(1995）年８月１日から同年９月14日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う席田青木遺跡の緊急発掘調査（第３次調査）の報告書である。
2. 席田青木遺跡は、1981年発行の『福岡市文化財地図（東部Ⅰ)』で「青木遺跡群」とする遺跡であるが、福岡市内には青木遺跡という名称が二ケ所存在するので、西区今宿青木遺跡については青木遺跡（ＡＯＫ）とし、博多区（旧席田村）の本遺跡は席田青木遺跡（ＭＡＫ）としている。
3. 遺構の呼称は記号化し、柵列をＳＡ、掘立柱建物をＳＢ、竪穴住居をＳＣ、溝状遺構をＳＤ、井戸をＳＥ、土坑をＳＫ、性格不明遺構をＳＸとした。
4. 本書に用いる方位は磁北である。またレベルは道路台帳地図の標高を移動したものである。
5. 調査区の座標は任意のものである。
6. 本書に用いる遺構図は、長家伸・久住猛雄・下川航也・瀬戸啓治・山口譲治・北村幸子・久保山勝広・永井大志・芝藤裕志・井上祐一郎・橋本幸樹・喜田敏が作成した。遺物の実測は、土器については北村・西山めぐみが行い、石器は田上勇一郎が、鉄器は久住が行った。製図は、成清直子・北村があたり、石器・鉄器は田上が行った。
7. 現場写真は、長家・久住が撮影し、遺物写真は久住が撮影した。
8. 本書の編集・執筆は久住が行った。
9. 本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。広く活用されたい。

遺跡調査番号	９５２１	遺跡略号	ＭＡＫ－３	分布地図番号	０２２－Ａ－２
調査地地籍	福岡市博多区青木１丁目290番ほか			事前審査番号	７－２－３３
開発面積	2,042㎡	調査面積	1,170㎡	調査期間	1995年８月１日～９月14日

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の組織……1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境……1
　1　遺跡の立地と既往の調査……1
　2　周辺の歴史的環境……2
Ⅲ　調査の記録……4
　1　調査の経過と概要……4
　2　井戸址（ＳＥ）……6
　3　土坑（ＳＫ）……8
　・表1　土坑一覧表……7
　4　竪穴住居址（ＳＣ）……9
　5　溝状遺構（ＳＤ）……10
　6　掘立柱建物（ＳＢ）……14
　7　不明遺構（ＳＸ）……14
　・表2　掘立柱建物一覧表……17
　8　出土遺物……17
　⑴土器……17
　⑵石器……25
　⑶鉄器……25
　・表3　土器観察表……17・19・20
　・表4　石器観察表……20
Ⅳ　まとめ……25

挿図目次

Fig.1　席田青木遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
Fig.2　調査地点位置図（1/5,000）……3
Fig.3　調査区概略図（1/500）……4
Fig.4　調査区基本土層図（1/30）……4
Fig.5　井戸址（ＳＥ）実測図（1/60）……5
Fig.6　土坑（ＳＫ）実測図Ⅰ（1/60）……6
Fig.7　土坑（ＳＫ）実測図Ⅱ（1/60）……7
Fig.8　ＳＣ01実測図（1/60）……8
Fig.9　ＳＤ20実測図（1/60）……9
Fig.10(上)　ＳＤ34・35・36・37・38・39・40ほか平面図（1/100）……10
Fig.10(下)　同上断面図・土層図（1/80、1/100）……10
Fig.11　ＳＤ01・02・03実測図（1/160）……11
Fig.12　ＳＤ04～13・16～19・21～24・26・27・29、ＳＸ01、ＳＫ09、ＳＣ02実測図（1/125）……12
Fig.13　掘立柱建物実測図Ⅰ（1/80）……15
Fig.14　掘立柱建物実測図Ⅱ（1/80）……16
Fig.15　掘立柱建物実測図Ⅲ（1/80）……18
Fig.16　掘立柱建物実測図Ⅳ（1/80）……19
Fig.17　土器実測図Ⅰ（1/4）……21
Fig.18　土器実測図Ⅱ（1/4）……22
Fig.19　土器実測図Ⅲ（1/4）……23
Fig.20　石器(1/1、2/3、1/3)・鉄器(1/2)実測図……24
Fig.21　遺構変遷図（1/600）……25
Fig.22　席田青木遺跡３次調査全体図（1/100）……付図

図版目次

PL．1

1．調査区東半（ＳＤ01･02･ＳＢ05）近景（西から）

PL．2

2．調査区東半全景（西から）

3．調査区西半全景（東から）

PL．3

4．ＳＸ16･17、ＳＤ01－Ⅺ～ⅩⅣ区、ＳＤ02－Ⅹ･Ⅺ区（東から）

5．ＳＤ01･02－Ⅰ区北側土層（南から）

6．ＳＤ02－Ⅺ区西端土器出土状況（東から）

7．ＳＤ20全景（北から）

8．ＳＤ20コーナー部土器出土状況（北から）

PL．4

9．ＳＤ34･35･36･38、ＳＢ12･13･14･32（南から）

10．ＳＤ36－Ⅱ･Ⅲ区（手前がⅡ区）土器出土状況（西から）

11．ＳＤ36－Ⅲ区土器出土状況（北から）

12．ＳＫ01完掘状況（北から）
※手前はＳＰ287（ＳＢ09）

PL．5

13．ＳＣ01全景（北から）

14．ＳＫ32(左)・ＳＫ31(右）完掘状況（北から）

15．ＳＥ01土層状況（西から）

16．ＳＥ05完掘状況（東から）

17．ＳＥ04土層状況（南から）

18．ＳＥ02土層状況（北から）

PL．6

19．ＳＢ05全景（西から）

20．ＳＢ02全景（南から）

21．ＳＢ04全景（東から）

22．ＳＢ01全景（西から）

23．ＳＢ03全景（西から）

24．ＳＢ06全景（西から）

25．ＳＰ300（ＳＢ06）石錘出土状況（東から）

PL．7

26．ＳＢ09全景（西から）

27．ＳＢ17、ＳＢ36？（南から）

28．ＳＢ07全景（北西から）

29．ＳＢ10全景（南から）

30．ＳＢ18(南から）

31．ＳＢ16全景（南から）

32．ＳＢ19(南西から）

33．ＳＢ11全景（南から）※中央はＳＥ05

PL．8　遺物写真

1･2．ＳＤ01出土須恵器

3･4･5･9･10･11．ＳＤ36出土古式土師器

6．ＳＤ35出土古式土師器

7．ＳＤ38出土古式土師器

8．ＳＤ34出土古式土師器

12･13･14．ＳＤ20出土古式土師器

15．ＳＰ－300出土石錘

16．ＳＤ03出土古式土師器

17･18･19．ＳＥ05出土古式土師器

20．ＳＤ02出土古式土師器

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経緯

1995(平成７）年４月12日、盛立建設株式会社代表取締役中嶋凡夫氏から、博多区青木１丁目290番ほかの開発計画事前審査願が福岡市に提出された。申請地は席田青木遺跡の隣接地であるが、平成５年の第２次調査によって丘陵の東側斜面から麓にも弥生時代から中世の集落遺構を主とする遺跡が広がることが判明していたので、西側斜面になるこの部分にも遺跡の存在が予想された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、1995年６月の19・22日に試掘を行った。その結果、申請地は開墾により一定の削平を受けているものの、弥生～古墳時代及び中世の遺物と遺構が試掘トレンチに検出されたため、遺跡の取り扱いについて関係者と協議を行い、マンション建設による遺跡の削平の前に、記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、盛立建設株式会社の受託調査として、1995年８月１日より調査を開始した。調査は、同年９月14日に終了した。

なお、整理作業は1996(平成９）年度に行い、報告書を作成した。

2．調査の組織（当時）

調査委託：盛立建設株式会社　代表取締役　中嶋凡夫
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
　　埋蔵文化財課第二係長　山口譲治
調査庶務：埋蔵文化財課第一係　西田結香
調査担当：埋蔵文化財課第二係　長家　伸、久住猛雄
試掘調査：埋蔵文化財課第二係　山崎龍雄、池田祐司
調査補助：瀬戸啓司
調査作業：小川　博、鹿毛賢次郎、小路丸嘉人、小路丸良江、村本義夫、森　教子、西畑盛行、脇坂信重、脇坂チカ、田中　榮、原ハナエ、結城千代子、井上トミ子、森山早苗、平田政子、網田美代野、川口シゲノ、山下アヤコ、西島マツコ、平田千鶴子、松本ミツ子、清末シズエ、俣野志津代、江嶋光子、高野瑛子、黒瀬千鶴、志堂寺堂、立水　清、谷　英二、徳永栄彦、永松トミ子、永松伊都子、広田安平、松井一美、村山市次、山下智子、山本后代、吉住クニ子、桑原隆浩、角本光紀、本村辰之祐、千原浩敬、北村幸子、橋本幸樹、喜田　敏、井上祐一郎、井上隆明、今塩屋毅行、清水耕平、江川博文、大薮健太郎、久保山勝広、芝藤裕志、永井大志、平川朋和、崎村春子、川原　愛、土倉崇子
整理作業：成清直子、北村幸子、西山めぐみ、尾崎君枝

以上の他、発掘調査においては山口譲治、松村道博、下村　智、宮井善郎、白井克也（福岡市教育委員会埋蔵文化財課)、下川航也の御助力、御教示を賜った。整理作業には田上勇一郎（埋蔵文化財課）の協力を得た。また炎天下の猛暑の中、発掘作業に携わって頂いた多くの作業員の方々や学生諸君にはあらためて感謝の意を表したい。

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境

1　遺跡の立地と既往の調査

席田青木遺跡は福岡平野の東を画する月隈丘陵の北端近くに位置する。席田青木遺跡は、これまでに

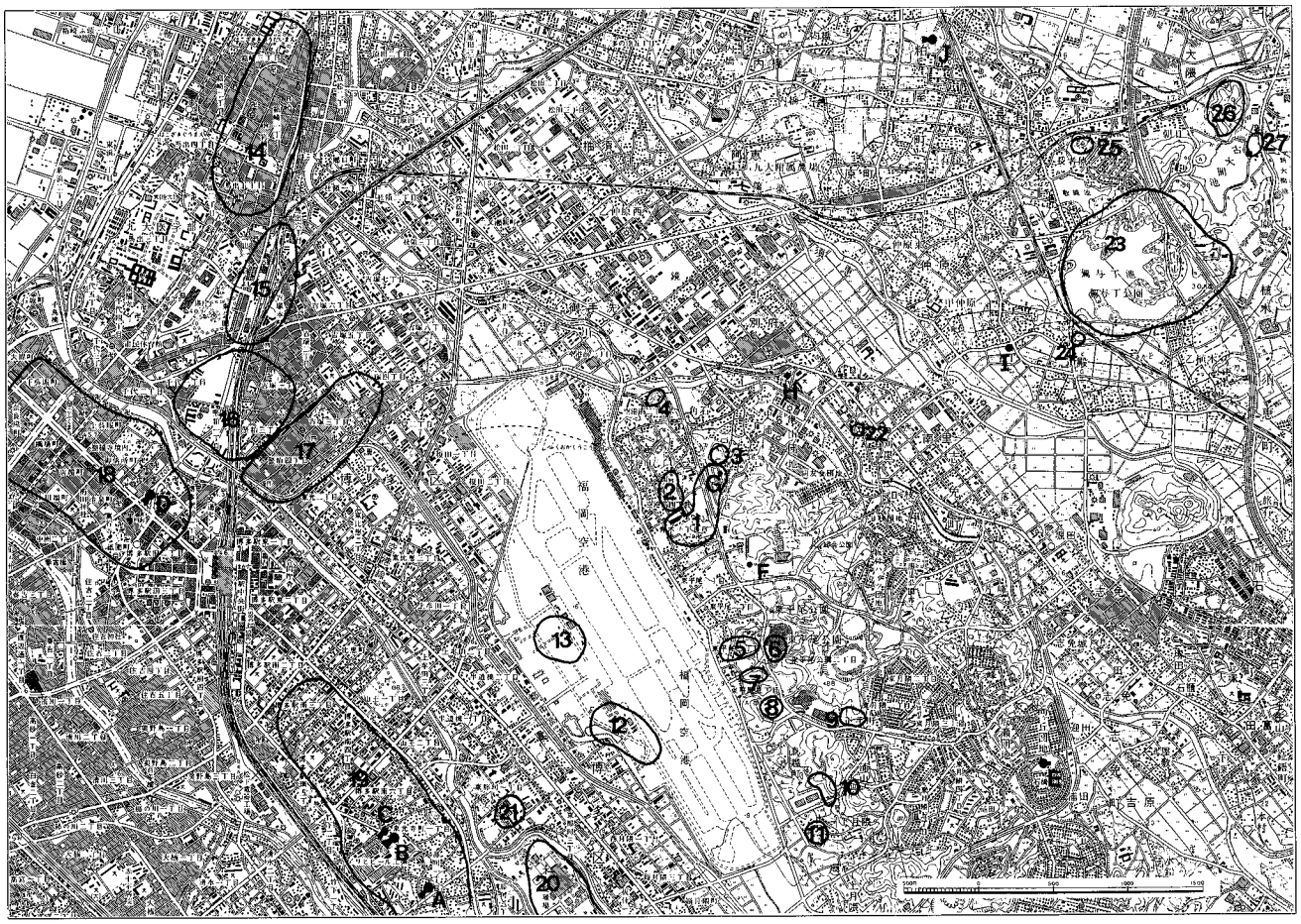


Fig.1　席田青木遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）

A　那珂八幡古墳　B　東光寺剣塚古墳　C　剣塚北古墳　D　博多1号墳　E　萱葉2号墳　F　席田北ノ浦1号墳　G席田青木1号墳　H　亀山古墳（墳丘墓）　I　酒殿宮崎遺跡箱式石棺墓　J　戸原王塚古墳

1　席田青木遺跡（黒塗部は第3次調査地点）　2　上臼井遺跡　3　中山遺跡　4　下臼井遺跡　5　久保園遺跡　6　席田大谷遺跡　7　席田赤穂ノ浦遺跡　8　宝満尾遺跡　9　宝満尾東遺跡　10　下月隈天神森遺跡　11　下月隈宮ノ後遺跡　12　雀居遺跡（第4・5次調査）　13　雀居遺跡（第2・3次調査）　14　箱崎遺跡群　15　吉塚本町遺跡　16　堅粕遺跡群　17　吉塚遺跡群　18　博多遺跡群　19　比恵・那珂遺跡群　20　那珂君休・深ヲサ遺跡　21　東那珂遺跡　22　桝角遺跡　23　駕与丁池遺跡　24　二ッ塚古墳　25　岩崎神社境内甕棺墓遺跡　26　焼地山古墳群　27　古大間池王造遺跡

2回の調査が行われている（Fig.2）。遺跡の北側の第1次地点では、弥生時代中期の甕棺墓群、7世紀中葉の単独古墳（席田青木第1号墳）、中世の城と溝、近世墓地が調査されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集）。第2次地点は遺跡の南西斜面にあたり、弥生中期の甕棺墓群、弥生後期・古墳時代後期の集落、中世の集落と墓地の一部が調査されている（第408集）。第1次・2次の調査地点は、現在は造成で切り離されているが、本来は一連の丘陵尾根線にあたる。甕棺墓群も連続するものであろう。第2次地点では、集落遺構はそれほど多くは検出されていないので、集落の縁辺と思われるが、地形と今回調査の成果から、第2次地点の西にある現在の地禄神社付近から第3次地点にかけての緩斜面が集落遺跡の中心的な広がりになると考えられる。また、志免町側の中山遺跡は同一遺跡であろう。

四王寺山から派生する月隈丘陵は、開析を多く受けた地形を呈し、幾重にも延びた舌状丘陵や独立丘陵が広がっている。席田青木遺跡の立地する丘陵もその一つである。第1・2次調査地点の遺跡は、西側に開けた丘陵尾根上に広がり、標高20～41mを測る。一方、今回調査の地点は、西側の現在の福岡空港のある沖積平野に下りる緩斜面にあり、標高は9～11m前後を測る。なお、遺跡の周囲を含めた月隈丘陵には、近世の築成と推測できる比較的大きな灌漑用溜池が多く存在する。

2　周辺の歴史的環境

月隈丘陵に分布する遺跡には重要なものが多い（Fig.1）。弥生時代では、席田青木遺跡の南1kmに、大谷遺跡・久保園遺跡・赤穂之浦遺跡・宝満尾遺跡が広がる。大谷遺跡では、弥生後期の竪穴住居から

鉄斧と青銅製鋤先が、別地点からは後漢鏡片が、久保園遺跡では弥生中期末の超大形掘立柱建物を含む集落が、赤穂之浦遺跡では鹿の文様を持つ横帯文銅鐸の鋳型が、宝満尾遺跡では４号土壙墓より前漢末の連弧文明光鏡がそれぞれ出土し、この付近が中期後半から後期前半の月隈丘陵における中心的な遺跡群であること示す。さらにこれらの南１kmには、上月隈遺跡などの甕棺墓地が分布し、下月隈天神森遺跡では板付Ⅰ・Ⅱ式の甕棺墓群がある。南２kmには国指定の金隈遺跡が所在し、450基以上の甕棺・土壙墓・石棺よりなる弥生時代の墓地が調査され、甕棺から出土した人骨群は貴重な資料であり、副葬されたゴホウラ製貝輪は南西諸島との繋がりを示す重要な発見になった。古墳時代では現在の東平尾公園の周辺に、席田北の浦１号墳など後期古墳が多く点在する。ただし古墳前期から中期の状況は月隈丘陵では不明確である。

Fig.２　調査地点位置図（1/5,000）

一方周囲に目を転じると、月隈丘陵の西側の福岡空港の周辺は、本来中小の河川が走る沖積平野である。幾度もの洪水と空港の造成によって、現在は全く不明になっているいわゆる隠れ微高地に、遺跡が存在する。その代表で質・量ともに充実しているのが雀居遺跡である。席田青木遺跡の1.5km南西にある。縄文時代晩期末（弥生早期）の夜臼式期の溝から出土した木器は、農耕文化の定着を示し、大量の土器群と組合式机や弧帯文のある木製短甲などの多種多様な木器を出土した弥生後期後葉の環濠は、内部に大形掘立柱建物があり、拠点的な集落と言える。周囲には弥生時代の全期間から古墳前期中頃までの遺構が分布する。さらに御笠川の対岸にある比恵・那珂遺跡群はこれをはるかに越える巨大遺跡である。弥生中期中頃から古墳時代前期中頃までは、「奴国」の中心の一大拠点であり、遺跡面積は150ha近くになる全国でも最大級の上記の時期の集落遺跡である。比恵遺跡では「那津屯倉」の可能性高い６世紀後半～７世紀初頭の特殊な大形建物群と三重柵列がある。

次に、月隈丘陵から北東の志免町側に目を向けると、北東１kmの亀山古墳が注目される。大形箱式石棺を主体とし、大量の朱を副葬した在地的な初期古墳または弥生終末の墳丘墓であり、方形墳とする説

もある。席田青木遺跡の第３次調査の弥生終末から古墳前期の遺構群は、案外この亀山古墳と関係が深いかもしれない。すなわち席田青木遺跡は弥生後期～古墳前期の月隈丘陵の中心集落の可能性がある。

Ⅲ調査の記録

1　調査の経過と概要

調査地付近は丘陵の西の緩斜面にあり、南から北に低くなる東西に長い土地である。現況は、南側は住宅地、北側は川をはさんで駐車場となっている。対象地の南東側は、北に接する住宅地の擁壁となっており、安全のため、ある程度引きをとって調査区を設定した。(Fig.３)。調査は、排土処理の都合上、調査区を東西に分割し、反転して実施した。地形的に少し高く、南側にやや出ている部分（南部調査区）は、東側の調査区と同時に調査を行った。

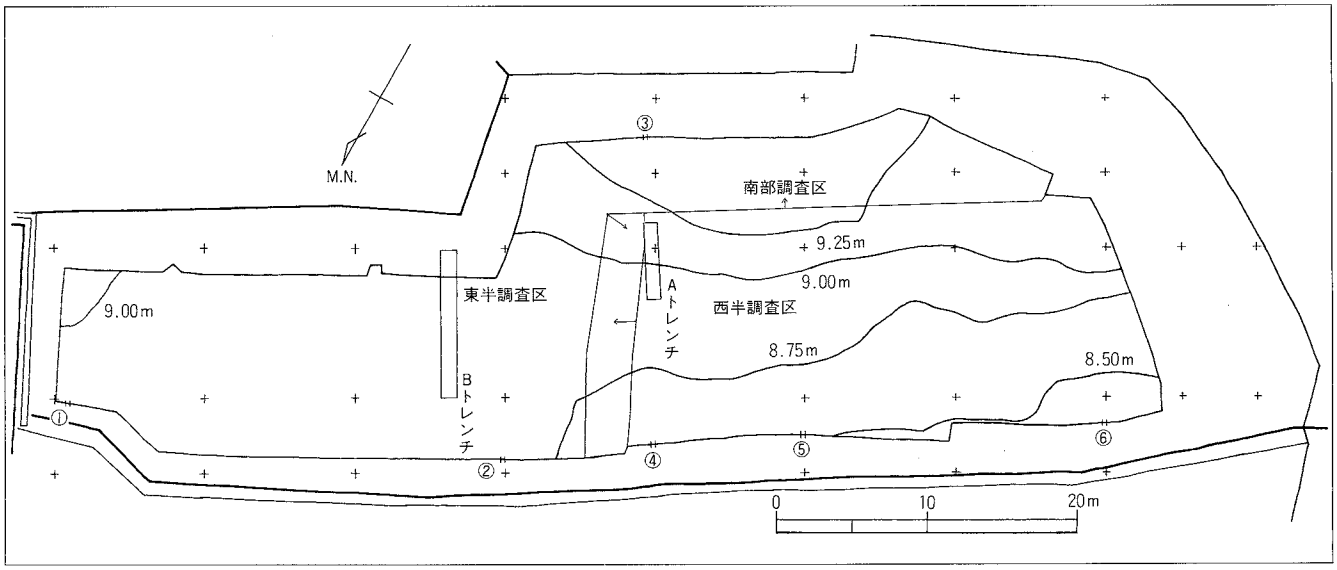
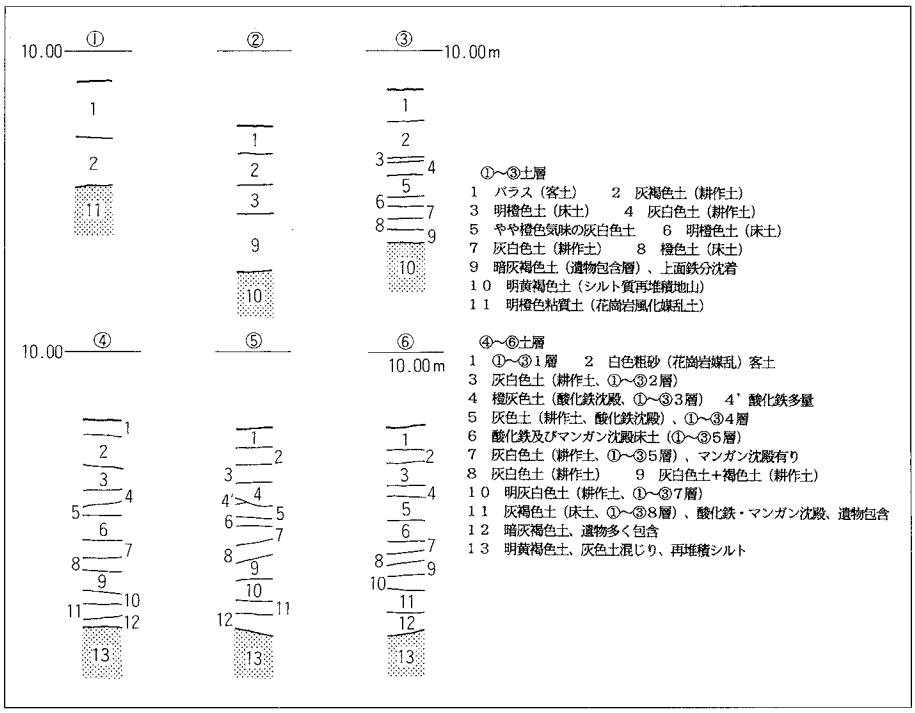


Fig.３　調査区概略図（1/500）　①～⑥は土層番号（Fig.４）

Fig.４　調査区基本土層図（1/30）



遺構実測は、地形に合わせた任意の座標杭を打ち、これをもとに２m方眼を組み、1/20で全測図を、必要に応じて1/10、1/20の個別実測図を作成し、地形測量と遺構配置図は1/100の平板測量を行った。標高に関しては、基準点が周囲に見当たらなかったので、福岡市土木局作成の道路台帳地図に記載されている道路面の標高から移動して調査区内の標高を求めている。

発掘調査は、1995年８

月１日に調査区の東側と南側の重機による表土剥ぎからまず着手した。同日に機材の搬入を行い、遺構の検出と掘削を開始した。８月14日に上記の調査区部分の全体写真を撮影した。８月23日までに、東半・南部調査区の、残りの掘削と図面作成などの作業を全て終了し、同日からこの部分の埋め戻しと、西半調査区の表土剥ぎの反転作業を行った。８月26日より、この調査区の遺構検出、掘削を開始した。９月６日に西側調査区の全体写真を撮影した。９月13日までに、残りの掘削、図面作成などの作業を全て終了し、翌９月14日に、機材の搬出と埋め戻しを行い、調査を委託した盛立建設株式会社に対象地を明け渡して調査は終了した。

調査地の表土は、表層がバラスや砂の客土であるが、その下は何枚かの水田土壌と床土で、現地表下約40～80cmで、遺構検出面となる（Fig.４）。地形的に高い方向になる南側では浅く、北側では深い。遺構検出面は現状の地形と同様、南から北へ低い。地山は、南側の高い部分では花崗岩媒乱土であるが、他は水成の再堆積土で、明黄褐色～赤褐色土のシルト質土である。深い井戸などの遺構の観察では、この下にやはり再堆積の黄褐色粘質土があり、その下に一部では花崗岩媒乱土、他は白色の粘土層がある。遺構は、竪穴住居が全て壁周溝のみになったり、柱穴のみになることからすると、全体として60～100cm前後削平されている。これは、調査区壁面の土層に見られるように、ある時期に周辺が水田開発で大きく地形の改変を受けていることに起因するものであろう。周辺に溜池が多く存在することも無関係ではあるまい。こうして著しい削平を受けているわりには、遺構の数は多く、以下に記述するように、古墳時代後期の環溝などのように、注目すべきものも少なくない。なお遺物は、弥生土器・古式土師器・須恵器を主とし、古代～中世の土師器・黒色土器・陶磁器数片・滑石製石鍋、石鏃・石錘・凹石などの石器、鉄器２点などがあり、パンケースにして30箱弱程度の量が出土している。

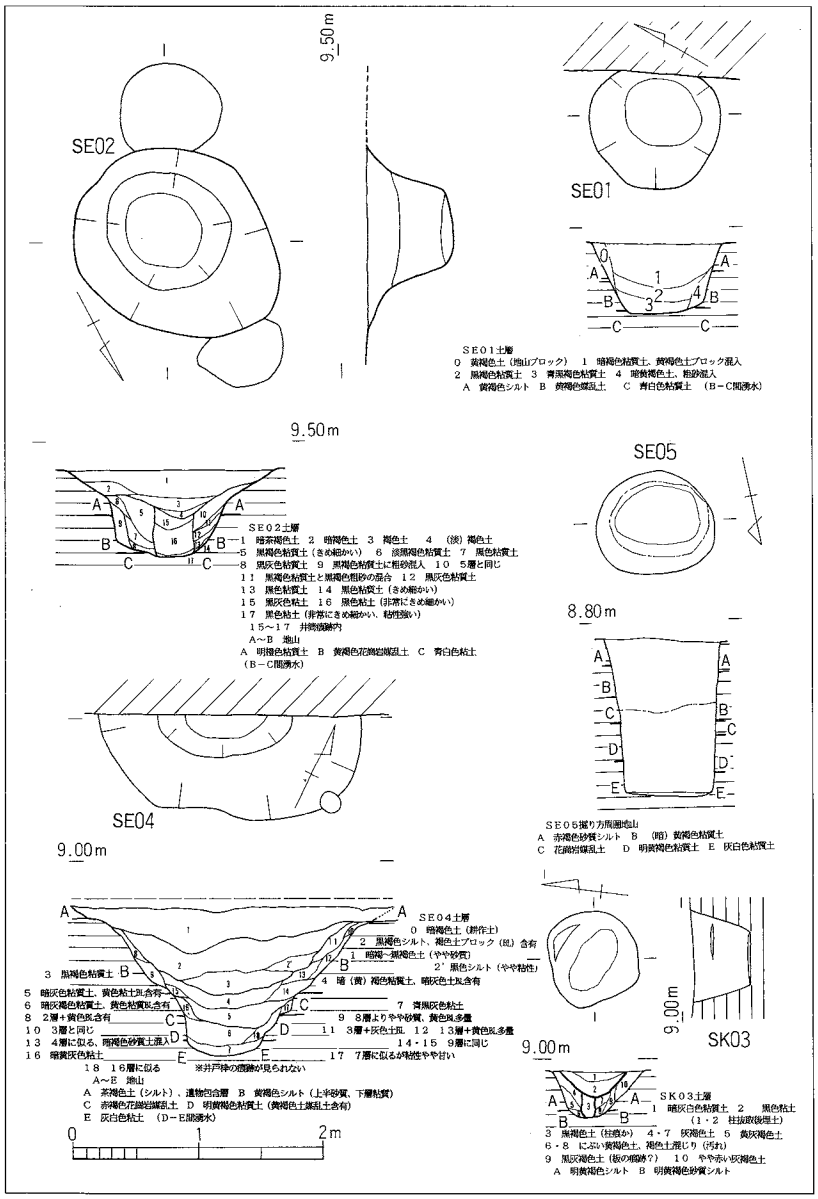


Fig.５　井戸址（ＳＥ－01･02･04･05）、土坑（ＳＫ－03）実測図（1/60）

以下、井戸址・土坑・竪穴住居址・溝・不明遺構・掘立柱建物の順で遺構について記述し、遺物のついては最後にまとめて記す。なお、紙面の都合上、全ての遺構・遺物について説明できていないことを断っておきたい。また全体の遺構配置や個々の遺構の位置については、付図（Fig.22）を参照して頂きたい。

2　井戸址（ＳＥ）

井戸は、古墳前期初頭～前半の素掘りのものを２基、古代から中世前期のものを２基検出した（Fig.5、なおＳＥ03は現代のもの）。その内容については、表１の土坑・井戸一覧表も参照されたい。

ＳＥ01（Fig.５右上、ＰＬ.5-15）

調査区東端で検出し、一部が調査区外に出る。暗褐色～黒褐色の覆土であった。ほぼ円形のプランで、素掘りの井戸である。底面は青白色の粘土層に達し、直上の黄褐色媒乱土層との間で湧水する。検出面より深さ56cmと浅いが、これは削平のためである。遺物は少なく、弥生土器・古式土師器の小片が出土している。時期比定は難しいが、一応古墳前期と考える。Fig.18－71は、出土した高坏である。ＳＥ01では土器があまり出土せず、次のＳＥ05とは埋没過程が異なる。

ＳＥ05（Fig.５右中央、ＰＬ.5-16）

西側調査区の西半中央で検出した。当初は土坑として掘り進めたが（ＳＫ22）、途中で井戸と判明した。楕円形の平面プランで、深さは130cm弱で、断面は竪穴状である。掘り方は中位で若干屈曲する。底面は平坦で、青白色の粘土層に達する。遺物は、古墳前期前葉の古式土師器が上層から下層にかけてやや多く出土した。パンケース２箱程である。埋土は、地山のブロックを含む土が上層にも多くあり、遺物の出土状況ともに、埋め戻されたようにも思われた。Fig.18-57～70は、ＳＥ05出土の古式土師器であるが、69・70の大形壺は上層から下層にかけて破片があるが、完形に復元するには破片がかなり不足している。一度別の場所で廃棄されたものが、土と一緒に埋められたためか。他の土器も、鉢等の小型器種以外は遺存率が悪い。なお59の注口状に口縁が曲がっている小形の椀は、底面に貼りついて出土した。なお掘立柱建物ＳＢ11は（Fig.14－４）、その軸線にＳＥ05があり、柱穴の出土土器片から建物の時期が古墳前期と見られることから、あるいは両者は共存し、ＳＢ11は上屋的な施設であった可能性もある。

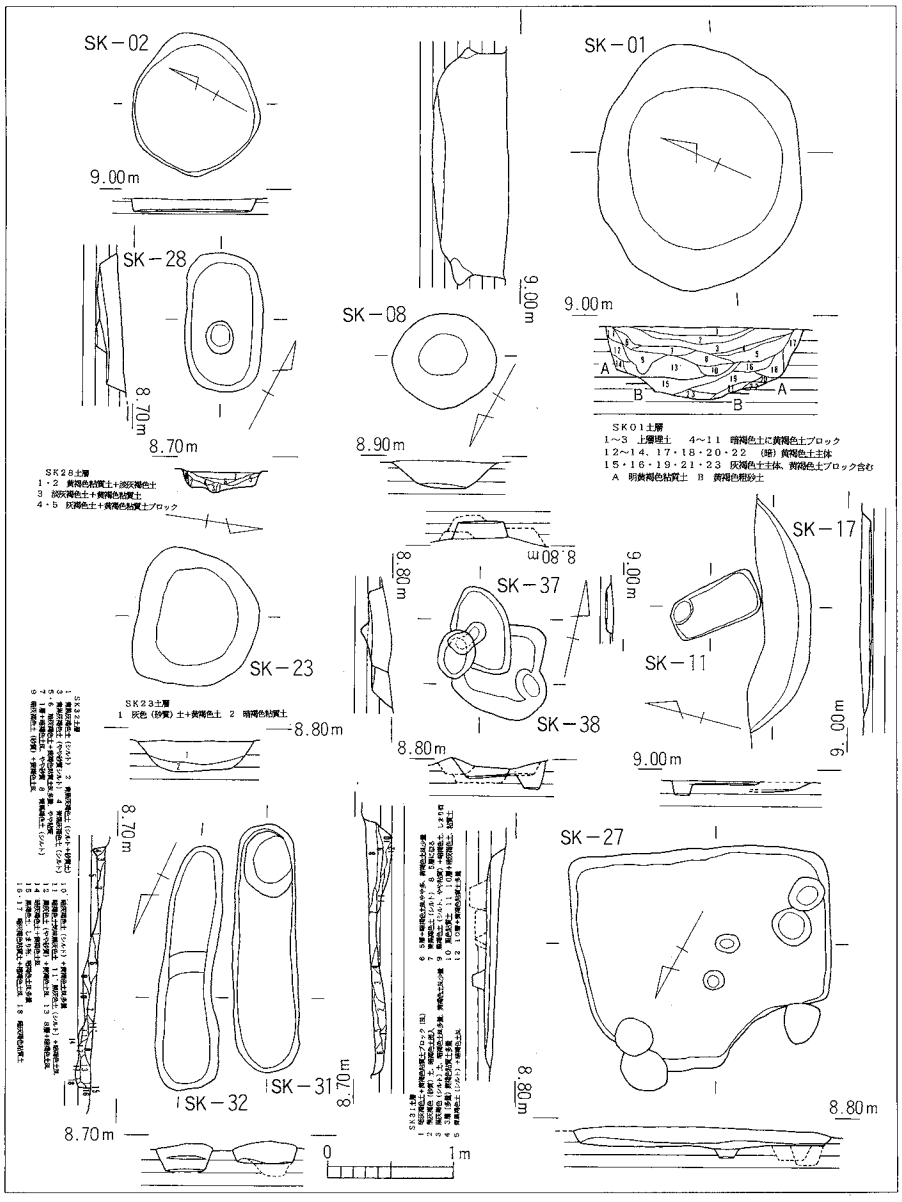


Fig.６　土坑（ＳＫ－01・02・08・11・17・23・27・28・31・32・37・38）実測図Ⅰ（1/60）

ＳＥ02（Fig.５左上、ＰＬ.5-18）

南側調査区中央で検出し

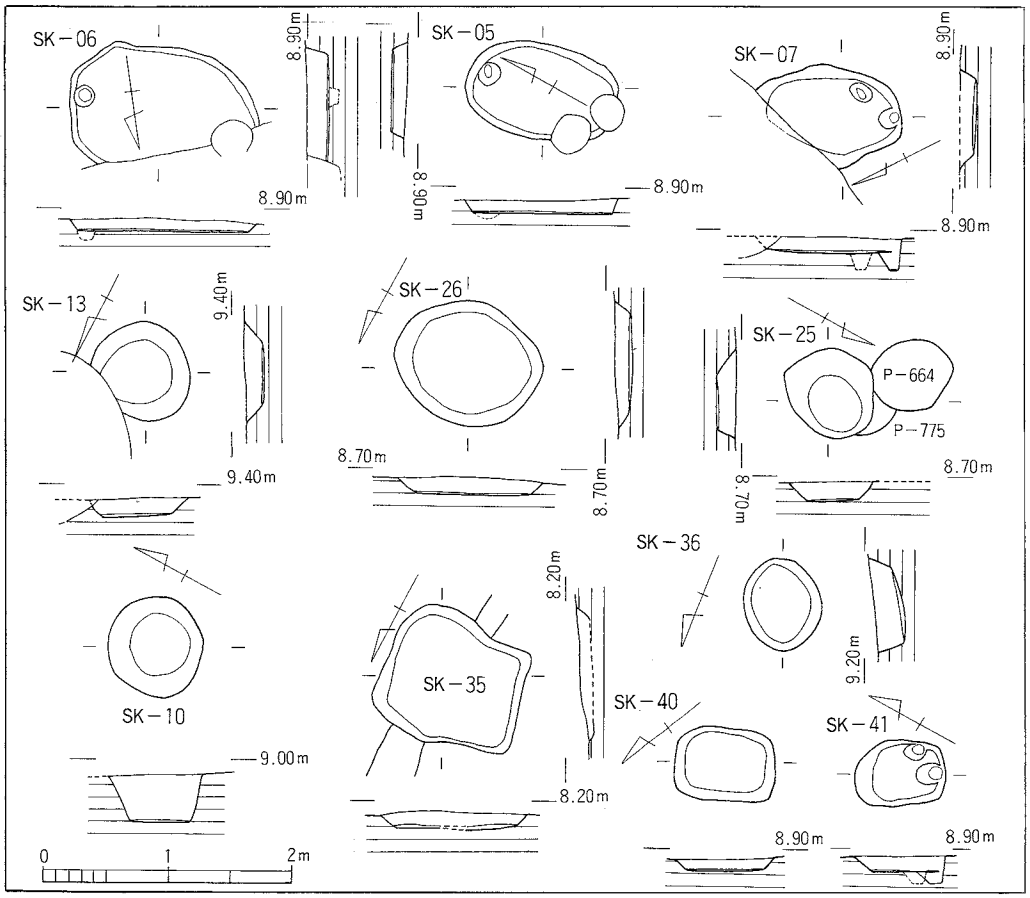


Fig.7　土坑（ＳＫ－05･06･07･10･13･25･26･35･36･40･41）Ⅱ　実測図（1/60）

表1　土坑一覧表（井戸を含む）

遺構番号	形状	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)	Fig.番号	PL.番号	切合	時期､その他
ＳＫ－01	円形	198×162	60	6	4－12	ＳＢ－09を切る	８世紀後半？
ＳＫ－02	円形	115×100	9	6	－	－	弥生終末頃？
ＳＫ－03	不整円形	78×78	48	5	－	－	柱穴？古墳初頭
ＳＫ－05	楕円形	122×76	13	7	－	－	古墳前期？
ＳＫ－06	不整楕円形	150×86以上	10	7	－	ＳＤ－18に切られる	弥生後期？
ＳＫ－07	不整楕円形	108以上（約118）×80	13	7	－	ＳＤ－01に切られる	弥生終末～古墳初頭
ＳＫ－08	円形	84×76	22	6	－	－	弥生中期末
ＳＫ－10	円形	81×76	38	7	－	ＳＰ－349を切る	８世紀末頃
ＳＫ－11	長方形	76×36	4	6	－	ＳＤ－01を切る	時期不明
ＳＫ－13	円形	81×76	16	7	－	ＳＥ－02に切られる	時期不明
ＳＫ－17	不整楕円形	186×40以上	7	6	－	ＳＤ－01に切られる	古墳前期？
ＳＫ－23	不整方形	112×94	26	6	－	－	中世以降
ＳＫ－25	不整円形	79×64	18	7	－	ＳＰ－664を切る	古代末(11世紀頃)?
ＳＫ－26	楕円形	119×94	14	7	－	ＳＣ－01を切る	11～12世紀頃？
ＳＫ－27	不整方形	206×176	14	6	－	ＳＤ－01を切る？	８世紀末頃
ＳＫ－28	楕円形	110×62	12	6	－	－	土壙墓？
ＳＫ－31	溝状	198×50	9(一部のみ20)	6	5－14	ＳＸ－16･17を切る	土壙墓？
ＳＫ－32	溝状	196×40	10	6	5－14	ＳＸ－16･17を切る	土壙墓？
ＳＫ－35	不整方形	112×86	15	7	－	ＳＤ－36･ＳＰ－07を切る	時期不明
ＳＫ－36	不整円形	74×62	26	7	－	ＳＤ－36を切る	時期不明
ＳＫ－37	不整楕円形	74×45	13	6	－	ＳＤ－01を切る	時期不明
ＳＫ－38	不整方形	76×74	15	6	－	ＳＫ－37に切られる	ＳＤ－01と同時期？
ＳＫ－40	長方形	80×57	12	7	－	－	時期不明
ＳＫ－41	不整方形	76×51	19	7	－	－	時期不明
ＳＥ－01	円形	104×92以上	56	5	5－15	一部調査区外	古墳前期？
ＳＥ－02	不整円形	173×148	68	5	5－18	ＳＫ－13を切る	古代末～中世前期?
ＳＥ－04	不整楕円形	210×76以上	115	5	5－17	北半調査区外	古代末～中世前期?
ＳＥ－05	円形	93×82	125	5	5－16	－	古墳時代初頭

た井戸である。平面は不整円形、断面は上半が逆台形状で、中位で屈曲し、下半は箱形となる。底面は平坦ではない。土層断面の観察では、下半の箱形の部分に井戸側の痕跡とみられる黒色粘質土の部分があった。木質は残っていないが、桶状のものなどが想定できる。遺物は極めて少なく、時期比定は、困難である。しかし、井戸の構造と上層より出土した土師器埦の破片から（Fig.18-73)、11世紀前後が考えられる。また上層から、越州窯青磁埦の口縁の小片が出土している。なお当初この井戸はＳＫ04として掘り始めている。

ＳＥ04(Fig.5左下、ＰＬ.5-17)

西側調査区中央東寄りの北壁で検出した。約１／２強が調査区外にある。断面は逆台形または、ＳＥ02に近い形状である。底面は平坦ではない模様。土層の観察では井戸側の痕跡は不明であるが、堆積状

況と掘り方から、井戸側があったが崩壊したか抜かれたかして埋まったものであろう。底面は灰白色粘土層に達し湧水する。遺物は極めて少なく時期比定は困難だが、土師器の坏ないし小皿の底部の破片があり、類似するＳＥ02の時期や、遺跡の中での位置付けから推定して、10世紀後半から12世紀までの間のどこかに位置付けられよう。

3　土坑（ＳＫ）

土坑は調査区全体で約40基強検出した。Fig.６・７はその一部である。詳細については表１を参照されたいが、以下にいくつかの土坑について述べる。**ＳＫ01**(Fig.６右上、ＰＬ.4-12）は当初井戸とも思われた大きな円形の土坑である。底面は曲線を呈し、湧水レベルに達しない。掘り方は下層の一部で外にえぐれている。遺物も遺構の大きさのわりには極めて少なく、廃棄土坑などではない。あるいは粘土掘削坑とも考えられるが確証はない。土層は、所々に地山ブロックを多く含み、あるいは埋め戻された可能性もある。時期比定は困難で、Fig.19-117は８世紀後半頃の須恵器の長頸壺の破片とみられ、この時期の可能性もあるが、土師器の小皿や埦の可能性のある小片もあり、あるいは11世紀前後に下るかもしれない。**ＳＫ02**(Fig.６左上）はミニチュアの埦（Fig.19-112）を１点出土し、弥生終末か。**ＳＫ03**(Fig.５右下）は、土坑というより柱穴である。古墳前期前葉頃で、やや大形の建物の一部をなすか。**ＳＫ31・32**(Fig.６左下、ＰＬ.5-14）は、ＳＸ16の覆土に掘り込まれる。南北に長い溝状ないし長楕円形状のプランであるが、覆土は青みのある黒色土で、両者は互い違いであるが一方の短辺が深くなっており、あるいは伸展葬の土壙墓かもしれない。時期は中世か。墓とした場合の副葬品はない。ＳＫ31から石鍋の破片が出土しているが（Fig.19-118)、これはＳＸ16からの混入であろう。なお近接するＳＫ30は円形のピット状の土坑であるが（位置は付図参照)、覆土が類似し関係するかもしれない。また**ＳＫ28**は（Fig.６左二列目)、覆土は異なるが、ＳＫ31などと方位が近く、類似のものか。**ＳＫ27**は（Fig.６右下）は、不整長方形の竪穴で、８世紀後半頃の須恵器片があり、時期を示すとみられるが、やや新しい土師器の埦の小片もある。**ＳＫ23**は（Fig.６左三列目)、覆土は遺構検出面の上の水田土壌に近い覆土であり、中世後期以降か。**ＳＫ37・38**は切りあうが（Fig.６中央)、ＳＫ37が新しく、ＳＫ38は６世紀後半から７世紀初頭のＳＤ01の掘り方の肩にあり、こ

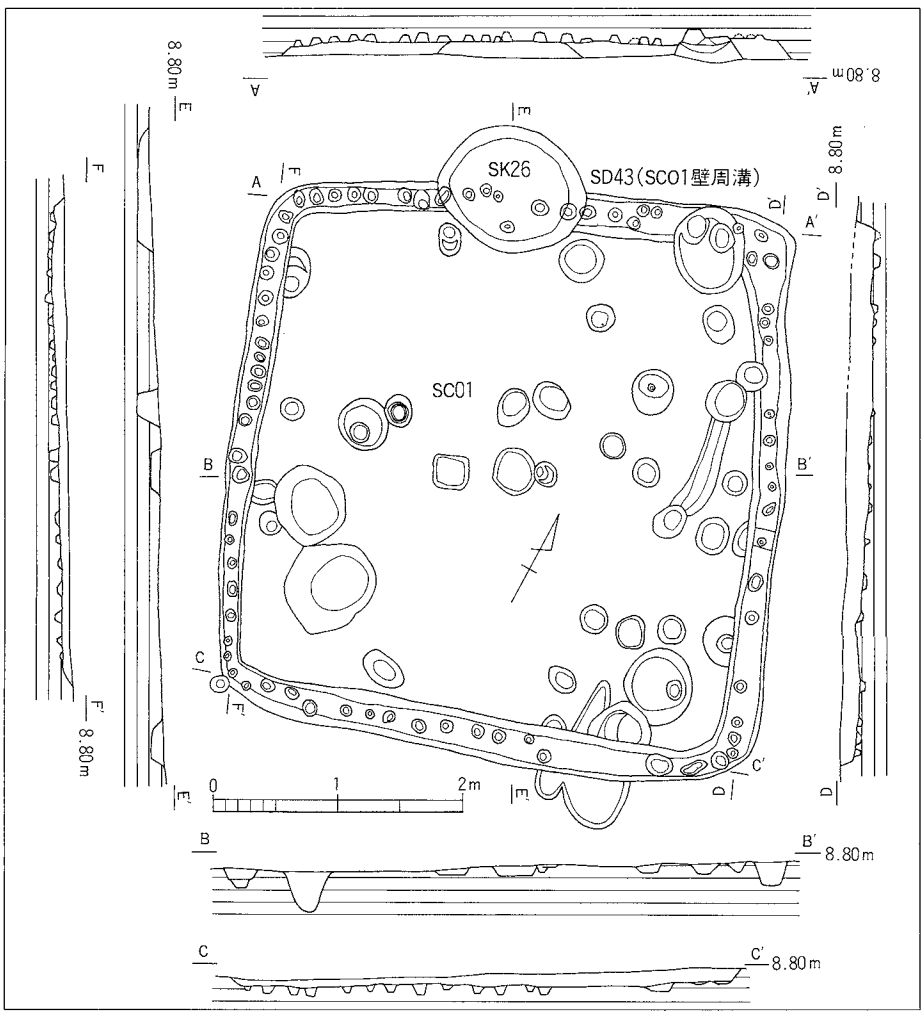


Fig.８　ＳＣ－01　実測図（1/60）

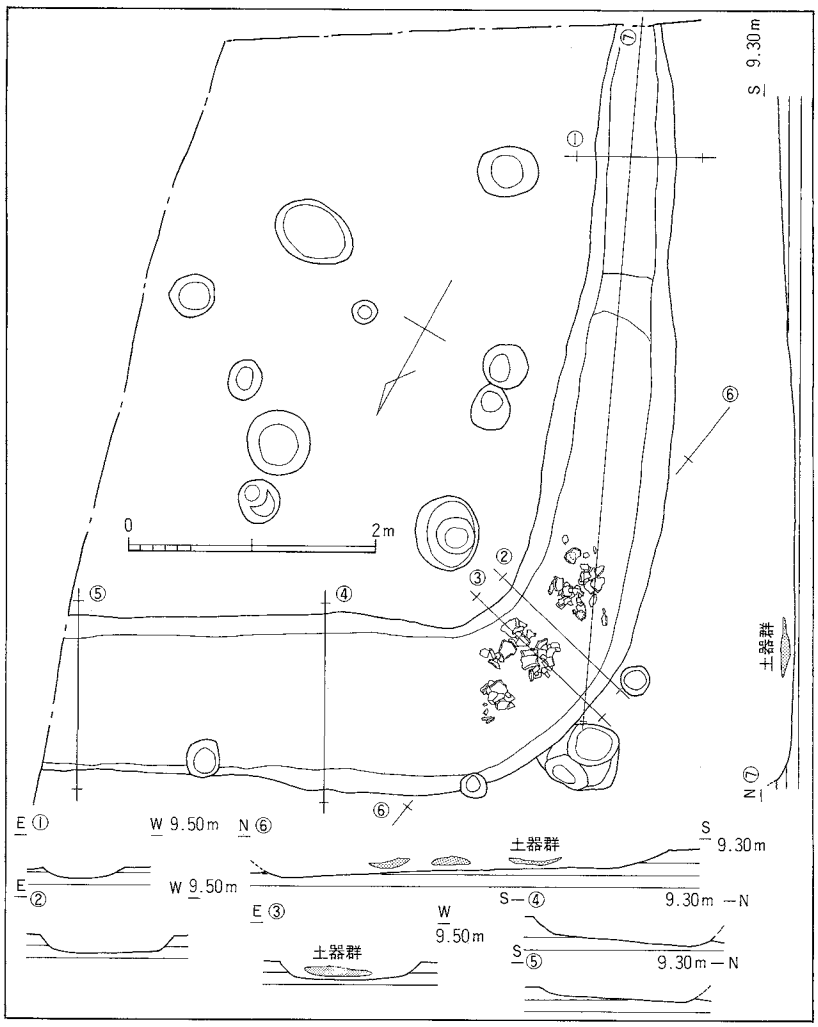


Fig.9　ＳＤ－20　実測図（1/60）

れと同時期か古いものである。なお、Fig.17-5の須恵器の小形の高坏の坏部片はＳＤ01出土だが、この両者の土坑の上面から出土したものにも坏部の同一個体片がある。ＳＫ08は（Fig.６中央二列目）からは弥生中期の器台が出土している（Fig.19-106）。ＳＫ10は（Fig.７左下）、８世紀末頃の土師器の坏（Fig.19-100）と須恵器片を出土。ＳＫ26は（Fig.７中央）、ＳＣ01を切り、白磁碗片を含む。11～12世紀頃か。ＳＫ06は（Fig.７左上）、弥生終末頃のＳＤ18に切られ、弥生後期のもの。ＳＫ25（Fig.７右二列目）とＳＫ35（Fig.７下列中央）は、土師器の埦の破片を含み、10～12世紀頃であろう。なおＳＫ20・21は、当初土坑と考えたが、土層断面の観察の結果、柱穴と判断したので（ＳＫ20は柱が抜かれていると判断している）、これらは掘立柱建物を構成すると考えている（Fig.15-6）。

4　竪穴式居址（ＳＣ）

竪穴式居址は２棟検出したが、いずれも残りが著しく悪いものである。また、掘立柱建物の頃で「二本柱」としたものは竪穴住居であろう。また１×１間の掘立柱建物のいくつかは竪穴住居であろう。また、ＳＤ36などに囲まれた部分には、主柱穴のない竪穴住居址が存在した可能性がある（後述）。さらに東側調査区西半から西側調査区東半にかけては、柱穴が多く、弥生時代中期の遺物が散見されるので、あるいは円形の竪穴住居址があった可能性もあるが、抽出できなかった。

ＳＣ01（Fig.８、ＰＬ.5-13）

西側調査区中央で検出した。竪穴の掘り込みは削平で失われ、杭列状の小穴が並ぶ壁周溝（当初ＳＤ43としていた）のみが残っていた。東西4.5m、南北4.65mを測り、方形プランである。壁周溝で囲まれた部分は、地山の赤橙褐色土がやや汚れたような状況で、貼床が若干残っていたようである。柱穴があるが、竪穴住居に直接伴うものはなく、主柱穴のないタイプのものであろう。カマドの痕跡は見られないものの、プランと規模や構造から、６～７世紀のものと考えるが、この時期を示す遺物はない。弥生土器・古式土師器の破片が少量出土した。Fig.19-108は弥生後期後葉～終末の甕である。

ＳＣ02（Fig.12中央下）

東側調査区の中央やや西の調査区北壁付近で検出した。大半が調査区外であり、東西の辺をＳＤ05・15で切られ、プランははっきりしないが、長方形のプランになるものであろう。削平で非常に浅くなっており、住居址とするのはやや苦しいが、弥生終末の土器片がいくつか出土しており、平面プランと合わせて住居址と判断した。ただし、主柱穴は検出できていない。ＳＤ27・29との切り合いははっきりし

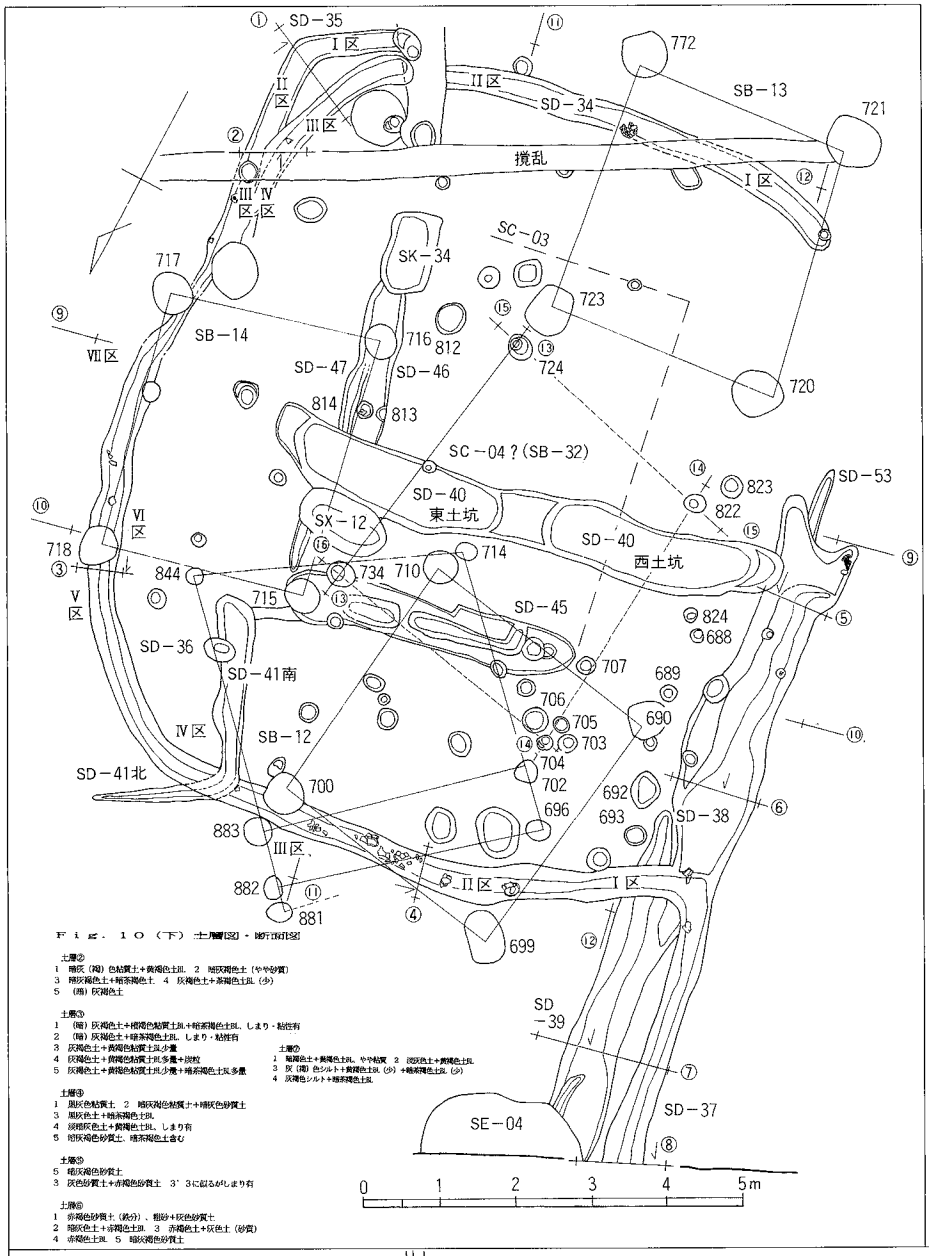


Fig.10 SD34・35・36・37・38・39・40ほか平面図（1/100），土層図（1/80），断面図(1/100)

ない。SD12が古墳前期初頭とみられるので、この両者をその続きと考えれば、SC02は切られていることになる。SC02は不明瞭だが弥生終末頃の竪穴住居址の痕跡であろう。

5 溝状遺構（SD）

(1) SD20（Fig.9、PL.3-7・8）

南側調査区東端で検出した。L字状に曲がる溝で、削平が著しいものの逆台形の断面になるか。外側と判断される西または北側の立ち上がりが若干緩い。溝は調査区の外に延び、方形の環溝か、もしくは方形周溝墓になるだろう。この溝の東側の調査区外に関しては、反転の際に重機で表土を剥いで遺構を確認したところ、主体部のようなものは認められなかったが、削平が顕著なので何とも言えない。南北6.2m以上、東西4.7m以上を測る。遺物はコーナー部分に集

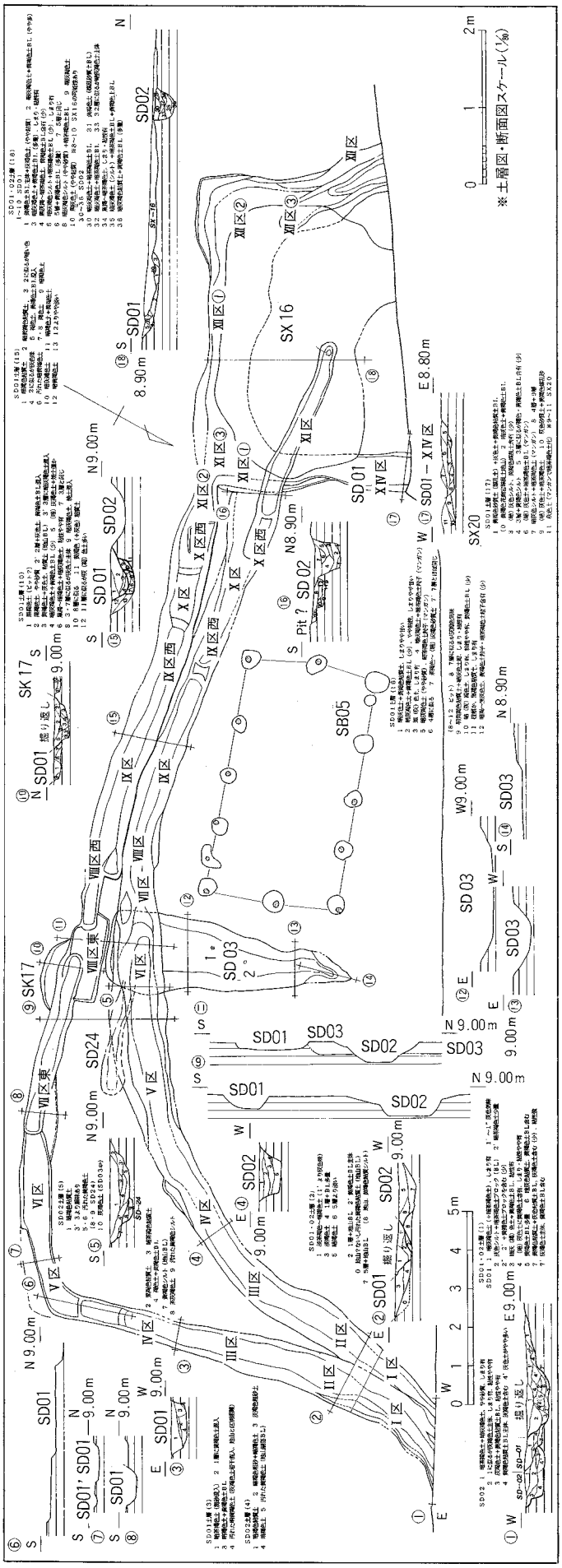


Fig.11　SD－01・02・03　実測図（1／160）

中して古墳初頭の古式土師器が出土した。ほとんどが在来系のもので、外来系土器はごく僅かである。（Fig.18-45～56）。また接合状況からすると、ここに据え置かれたものとするより、別の場所で壊れたものが廃棄された可能性が高い。ただし底面直上に出土し、しかもコーナー部分という状況は、何らかの祭祀的行為を想定できる。よく見ると、幅30cm弱の土器を出土しない部分があり、あるいは「通路」かもしれない。この意味でも方形周溝墓（方墳？）の可能性を示唆する。なお在来系土器を多く出土する古墳初頭の方形周溝墓の例には、福岡県小郡市横隈山遺跡３号方形周溝墓がある。

⑵ＳＤ34～39、40ほか（Fig.10、ＰＬ.4-9）

ＳＤ34・35・36・37・38・39は一連の溝で、一定の空間を不整円形または不整方形に囲む一種の環溝である。ＳＤ35はＳＤ34に切られ、ＳＤ39はＳＤ36・37に、ＳＤ53はＳＤ38に切られるが、全体の配置からは、ＳＤ35とＳＤ53・39は本来ＳＤ36とも一連のもので、掘り直された結果、ＳＤ34・36・37・38の環溝となったものだろう。両者の溝群の土器は、古いほうが古墳前期初頭（ⅡＡ－ⅡＢ期）、新しいほうが前期前葉から中頃（ⅡＢ－ⅡＣ期）であり（Fig.19-75～98）、屋敷地の存続期間を示す。溝の底面は、ＳＤ34・35のある北のほうから左回りに低くなってゆき、ＳＤ38・37（古いほうはＳＤ53・39）に合流し、北に向かって低くなる。排水的な機能を考えることができる。なお、ＳＤ36の南側には土器が集中して廃棄されており、器種も甕を中心とし、日常的な生活空間の色彩が強い。

これらの溝に囲まれた空間には、削平されているが竪穴住居が存在した可能性が高い。ＳＫ34とＳＤ46・47、ＳＤ50、ＳＤ45は一連のものとみられ、特にＳＤ47（ＳＤ46の一部）とＳＤ50、ＳＤ45の内部の細かい溝は竪穴住居の壁周溝と考えられる。南・西辺は不明なものの、東西約3.9m×南北約5.5mほどの竪穴住居が想定できる（ＳＣ03）。ただし、主柱穴は無い。ＳＤ46の内部のＳＰ－814出土

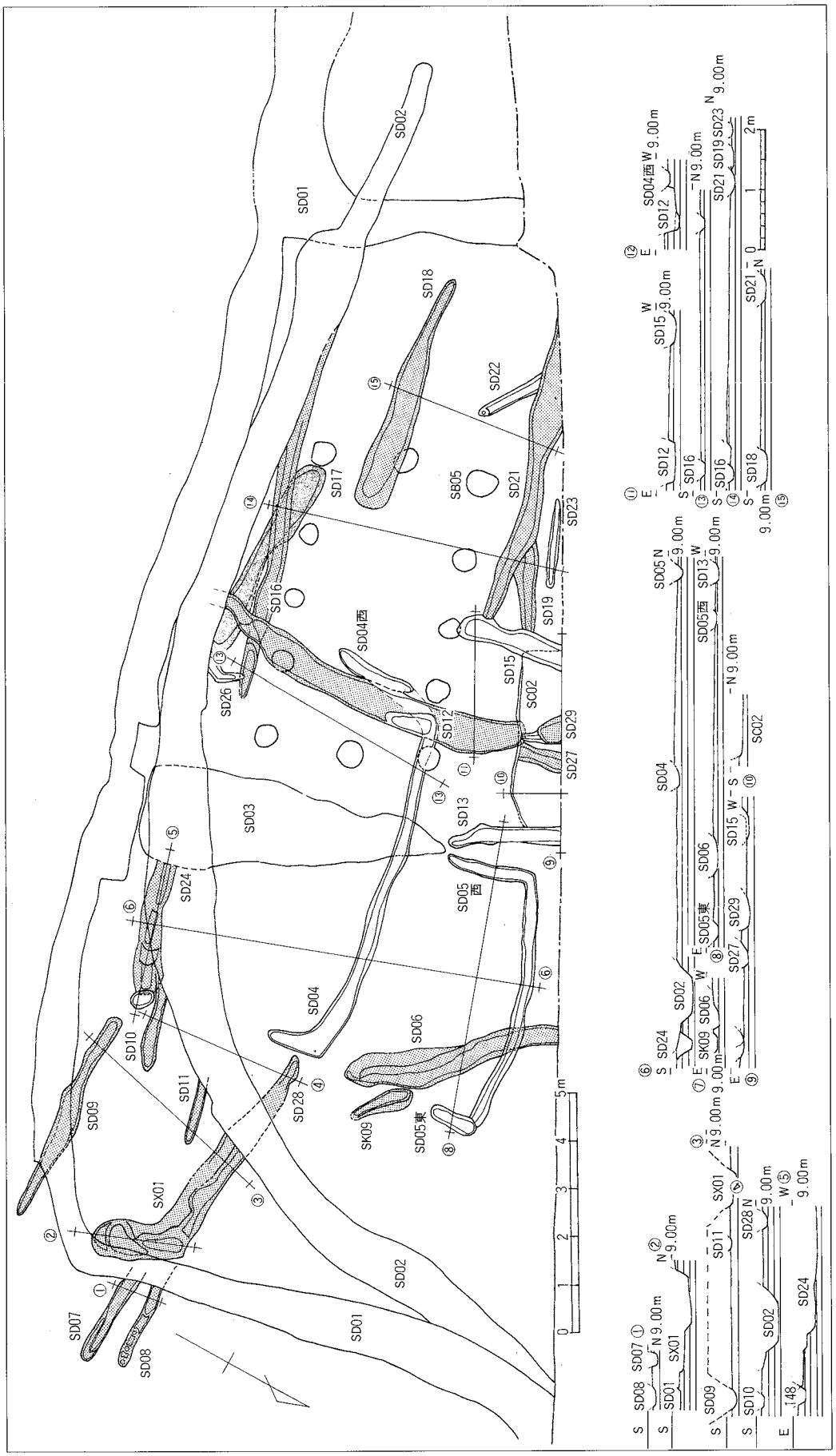


Fig.12 SD－04～13・16～19・21～24・26・27・29、SX－01、SK－09、SC－20 実測図（1／125、断面1／100）

の鉢形土器片は、SD34のものと接合している（Fig. 17-77）。さらにSP－724・734の両者の覆土や掘り方や底面レベルが類似し、柱が西側から立てられた点でも伴うと考えられ、これをSB32とし、二本柱の竪穴住居であった可能性が考えられる（SC04）。これにはSP－822・704が伴い四本柱になる可能性もあるが、柱筋がゆがむのでこの想定は無理か。

SD40は、SD38やSD46(＝SC03)を切り、時期は不明だが、方向や他の遺構との関係から、SD01の時期ではないかと考える。東側と西側がそれぞれやや深くなって土坑状になる。Fig.19-113 は

ミニチュア土器で、古式土師器の小形器台を写したものであり、本来は上記の古墳前期の遺構群に関係するものであろう。ＳＤ41は、ＳＤ36を切るＬ字状の小溝であるが、根拠は薄弱だが、やはりＳＤ01に近い時期（６～７世紀）の竪穴住居の壁周溝の痕跡と考えられる。

⑶ＳＤ01・02(Fig.11、ＰＬ.1-1､2-2・３､3-4)

東側調査区から西側調査区の東端にかけて検出した。ＳＤ01がＳＤ02を切る。ＳＤ01は略方形の環溝で、ＳＢ05を伴い、調査区外北側に延びると想定される。ＳＤ02は逆に丘陵の縁辺を囲む可能性もある。西側調査区部分では、ＳＸ16との関係が当初不明確で、ＳＤ01として取り上げた遺物の一部はＳＸ16のものとみられる。ＳＤ01の西側の部分は、溝が分かれ、別区状となる。ＳＤ01のⅩⅢ区の下層は、断面の形状からＳＤ02の続きである可能性がある。ＳＤ02はⅪ区の西で一度途切れるので、この間はあるいは出入り口かもしれない。土層断面を観察すると、ＳＤ01・02とも、部分的なものの可能性もあるが、掘り返しや数度の溝さらえの痕跡がある。また溝の底面が、数ケ所段状になる部分があり（特にＳＤ01)、掘削単位を示すか。ＳＤ01からは須恵器や土師器が出土し（Fig.17-1～９)、九州須恵器編年のⅢＢ～ⅣＡ期にわたり、掘り返しを考慮して、６世紀後半から７世紀初頭にかけて機能した環溝であろう。２×４間の掘立柱建物（ＳＢ05）を伴うとすれば、上位階層の居宅的な遺構であろう。なお、ＳＤ01には古式土師器・弥生土器も出土している。ＳＤ02からは、量はやや少ないが古式土師器を出土し、溝の掘削時期は古墳前期初頭で、掘り返しと、土器の様式幅を考慮して、古墳前期中頃まで機能した可能性がある。Fig.17-11は、Ⅺ区西端より出土したもので（ＰＬ.3-6)、布留Ⅰ式併行（ⅡＢ期）の甕Ｄ（北部九州の布留式甕）である。ＳＤ02の北側には、同時期の遺構では確実なものがない。

⑷ＳＤ03(Fig.11)

ＳＤ01・02に囲まれた部分の中央に、それらと直交して検出された。ＳＤ02に切られるが、溝の時期は出土土器から古墳初頭（ⅡＡ期）であり（Fig.17-21～28)、ＳＤ02と近接する時期で、ＳＤ02の掘り返しを考慮すると、当初は一連の溝であった可能性が高い。溝は北端で細くなって終わる。地形的に低くなる方向であり、あるいは溝の中への入口であったことも考えられる。

⑸ＳＤ06・07・08・09・10・11・12・16・17・18・21(Fig.12)

これらはＳＤ01・02に絡むか、その北側にある溝のうち、弥生時代から古墳時代前期のものである。このうちＳＤ17は弥生中期後半の土器片を出土し（Fig.19-102・103)、その時期であろう。またＳＤ12は、ＳＤ16・17を切り、ＳＤ02に切られるが古墳初頭の在来系の丸底の壷形土器片を含み、ＳＤ03と時期的に共存するか。ＳＤ08・09と溝状のＳＸ01からＳＤ21にかけての溝の列と、ＳＤ09・24・16(18？)の溝の列は平行し、いずれも出土土器から弥生後期後葉から終末期と思われ、この間にはさまれた空閑地はあるいは道状のものかもしれない。削平を勘案すれば、本来は幅1.5-2m程度のものである。道でなければ、並行する二つの溝列は、二重の環濠かもしれない。この場合丘陵の裾を廻り、集落の中心は溝群の南側となる。いずれにしても興味深い。これらの溝のうちＳＤ24は、底面が階段状になっている。ＳＤ06は、小形丸底壷の破片を出土し、下限は古墳前期前葉にあるが、上記の溝群の北側の列が、ＳＸ01とＳＤ21の間で途切れることからすると、あるいは“道”が、この部分で北に枝分かれするのかもしれず、この場合掘削時期は弥生終末にさかのぼるかもしれない。

⑹ＳＤ04・05(Fig.12)

いずれも「コ」字状の小溝で、ＳＤ04はＳＤ12を、ＳＤ05はＳＤ06を切る。おそらく削平された竪穴住居の壁周溝の痕跡と考える。いずれも遺物は少なく時期比定は困難だが、弥生終末ないし古墳前期の溝を切る点などから、ＳＤ01に伴う時期のものと推定する。ＳＤ04はＳＢ05に切られる。なお、ＳＤ13・15は、遺物ではよく分からないが、これらと同様の時期になる可能性がある。

6　掘立柱建物（ＳＢ）

調査区全体で約40棟前後検出ないし復元した。現場では、主要な柱穴について、平板図における柱穴の配置や、覆土の色・質、掘り方の深さ・形状、半裁した土層断面を常に見ながら、柱穴の組みあわせによる建物の復元に務め、上記のうち約半数を現場において推定した。残りは図上で推定したものである。このうち「二本柱」としたものは、掘り方・土層の観察から、他に組みあう柱穴が無いが、その二つは関連性が極めて高いと判断したもので、おそらく弥生後期から終末（一部は古墳前期か）の竪穴住居の削平されたものであろう。また、１×１間の建物のうち、柱穴が比較的深く、調査区が北に向かって低くなるのと無関係に柱穴の底面のレベルが近似するものは竪穴住居（古墳前期か）の可能性が高い。柱穴の半裁は、現場で建物を構成すると判断した比較的多くについて適宜行い、土層図を作成したが、今回の報告ではそのほとんどについて割愛している。各建物（全てではない）の詳細については、表２の掘立柱建物一覧表を参照されたい（図は、Fig.13・14・15）。

これらのうち、**ＳＢ01・03・04**(いずれもFig.13）はほぼ同一方向で、同時期のものであろう。時期比定は難しいが、ＳＢ03の柱穴のいくつかから土師器の坏の破片が出土しており、ＳＰ－26からは土師器坏の底部片があり、やや厚く板目圧痕のあるものは13世紀頃のものと考えられ（ただし切り離しの調整は摩滅不明）、これらの建物群の時期を示すか。なおＳＢ03は構造的に厩屋の、ＳＢ04は倉庫の可能性がある。ＳＢ03と切りあう形になる**ＳＢ26**は（図は付図参照）、柱穴より奈良時代頃の須恵器や土師器の破片が出土しており、Fig.19-101の土師器の甕形土器は８世紀末頃のものか。**ＳＢ05**は（Fig.14）、位置的にＳＤ01・02のいずれかに伴うと思われ、柱穴内の遺物の下限は古式土師器であるものの、ＳＤ02とは近接しすぎており、ＳＤ01に伴うと考える。これは柱穴と、いくつかの溝との切り合いからしても妥当であろう。Fig.19-119は、この柱穴の一つのＳＰ－161から出土したミニチュアの土製品（の一部）だが、あるいは土馬に類する土製品かもしれない。この建物の柱間の一部には束柱があり、建物中央には屋内棟持柱がある。**ＳＢ12・13・14**は、ＳＤ36と切りあうが、いずれも柱穴の形状・掘り方、建物の方位や形態・規模が類似し、前後する時期のものであろう。Fig.19-100の土師器小皿は、ＳＤ36－Ⅲ区出土と注記されて取り上げられていたが、明らかに別の時期のもので、ＳＢ12を構成するＳＰ－700の可能性が高い。この場合、ＳＢ12は12世紀後半前後となる。**ＳＢ15・17**はこれらと方位が近いが、柱間と柱穴の掘り方が異なり、弥生終末ないし古墳前期に属する可能性が高い。ＳＢ17のＳＰ－646より、ほぼ完形の弥生終末の鉢形土器が出土している（Fig.19-109）。**ＳＢ06**は、１×１間の建物だが、先述した理由で竪穴住居の削平であろう。ただし、竪穴住居の柱穴は経験的に柱が抜き取られている場合が多いが、この建物の柱穴は全て柱痕があった。ＳＰ－300より大形の石錘の破片が出土している（Fig.20-14、出土状況はＰＬ.6-25）。**ＳＢ09**は、そのうちの柱穴二つより底面近くで弥生中期の土器片が出土し（Fig.19-114～116）、時期も弥生中期後半であろう。**ＳＢ37**は（Fig.15）、二本柱の竪穴住居の削平とみられるが、このＳＰ－808からは、やや大形の鉢形土器（弥生終末）がほぼ完形で出土している（Fig.19-104）。これらの建物の時期比定は、各柱穴内の遺物や、方位、建物の規模・形態・構造、柱穴の掘り方・覆土、及び切り合い関係から総合的に判断しているが、遺物も多くは小破片のみで、上限を示すにとどまり、実際はなかなか難しく断定できない部分もあることをお断りしておく。

7　不明遺構（ＳＸ）

検出時において、土坑とも溝ともつかない不整形の遺構や、プランや掘り方の不明確なものを不明遺構（ＳＸ）とした。土坑（ＳＫ）や溝（ＳＤ）などに編入すべきものもあり、一部は調査後変更しているが、多くはそのままになっている。ここでは、調査当初「包含層」としたＳＸ16・17について記述する。

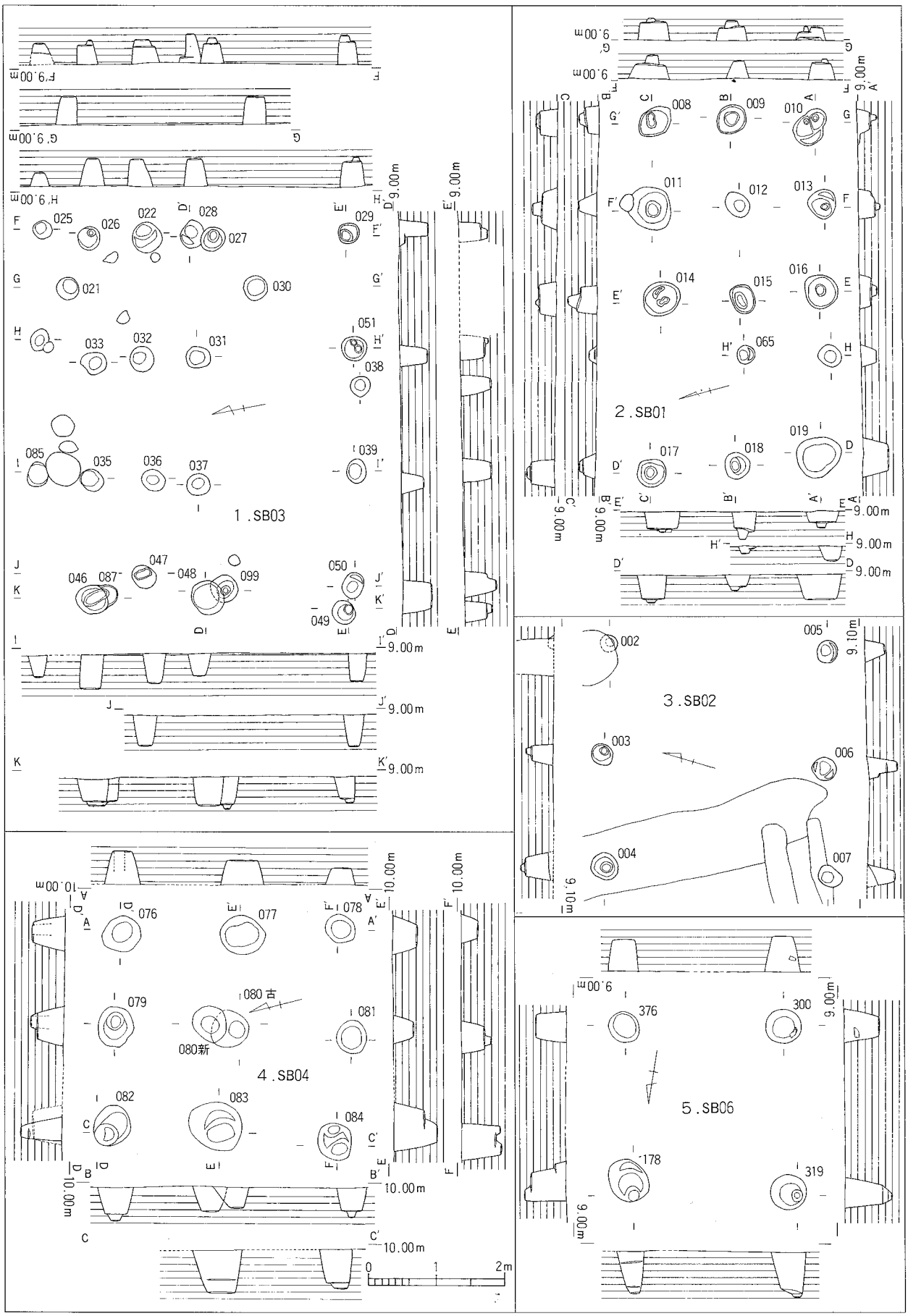


Fig.13　掘立柱建物実測図Ⅰ（1/80）※柱穴の横の数字はＰｉｔ番号

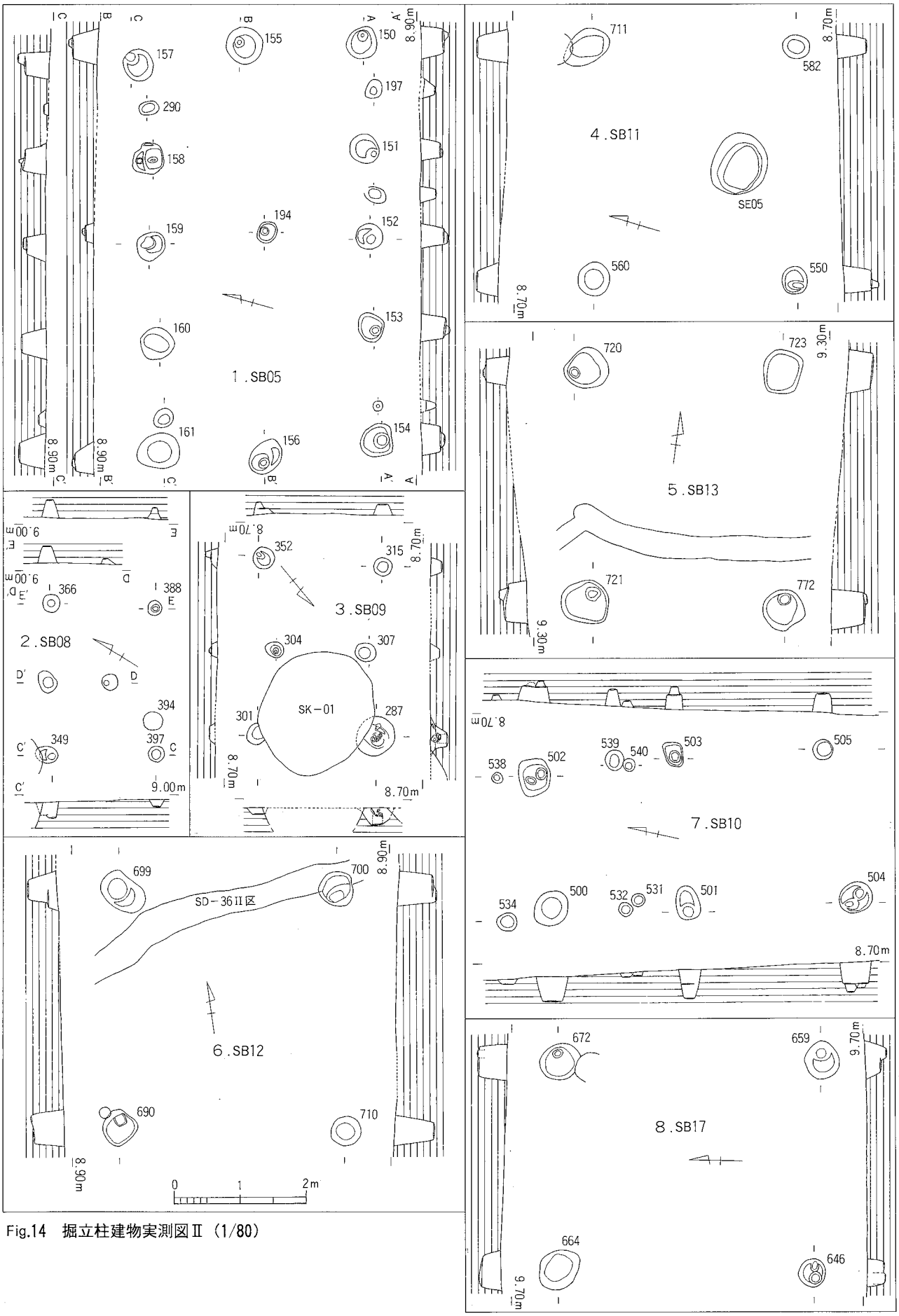


Fig.14　掘立柱建物実測図Ⅱ（1/80）

表２　掘立柱建物一覧表

遺構番号 ＳＢ－	規模 （梁行×桁行）	建物の形状 （梁行×桁行）	方位	Fig.	ＰＬ.	時期
ＳＢ－01	2.4×5.16(ｍ)	２×３間	N－74°－W	13－２	６－22	12～13世紀
ＳＢ－02	3.26×3.34	１×２	N－74°－E	13－３	６－20	古墳前期？
ＳＢ－03	4.52×5.50	２×３　庇付？	N－76°－W	13－１	６－23	12～13世紀？
ＳＢ－04	3.18×3.28	２×２　総柱	N－14°－E	13－４	６－21	12～13世紀？
ＳＢ－05	3.56×6.0	２×４　平屋建物か	N－75°－E	14－１	６－19	６世紀後半～末？
ＳＢ－06	2.42×2.52	１×１　竪穴住居？	N－82°－E	13－５	６－24	古墳前期？
ＳＢ－07	1.42×1.66	１×１	N－33°－E	16－３	７－28	弥生（後期－終末）？
ＳＢ－08	1.58×2.32	１×１	N－58°－E	14－２	－	古墳前期？
ＳＢ－09	1.80×2.60	１×２	N－39°－E	14－３	７－26	弥生中期後半
ＳＢ－10	2.10×4.56	１×２	N－22°－W	14－７	７－29	古墳前期？
ＳＢ－11	3.16×3.56	１×１	N－73°－E	14－５	７－33	古墳前期
ＳＢ－12	3.40×3.45	１×１	N－８°－E	14－６	４－９	12世紀頃？
ＳＢ－13	3.16×3.44	１×１	N－８°－W	14－５	４－９	12世紀頃？
ＳＢ－14	2.78×3.46	１×１	N－15°－W	15－１	４－９	12世紀頃？
ＳＢ－15	3.38×4.24	１×１	N－１°－E	15－７	－	弥生（後期～終末）？
ＳＢ－16	2.45×3.05	１×２	N－14°－W	15－２	７－31	古墳前期？
ＳＢ－17	3.88×3.40	１×１　竪穴住居？	N－１°－W	14－７	７－27	弥生終末？
ＳＢ－18	4.38×	２×？　庇付	N－20°－W	15－３	７－30	中世前期？
ＳＢ－19	2.0以上×4.05以上	１以上×３以上	N－20°－E	15－５	７－32	中世前期？
ＳＢ－21	3.35×	１×？　大形建物？	N－67°－E	15－６	－	弥生？
ＳＢ－22	2.23×2.33	１×１	N－65°－W	15－４	－	時代不明
ＳＢ－25	1.92×2.15	１×２	N－73°－E	15－10	－	弥生？
ＳＢ－30	－	２本柱　竪穴住居	N－８°－E	16－２	－	弥生（後期～終末）？
ＳＢ－31	（2.05×　　）	２本柱　？　竪穴住居	N－68°－E	15－８	－	弥生（後期～終末）？
ＳＢ－32	－	２本柱（１×１間？)竪穴住居か	N－９°－E	10－上	４－９	古墳前期
ＳＢ－33	3.52×3.54	１×１　庇付	N－45°－W	16－１	－	弥生終末？
ＳＢ－36	－	２本柱　竪穴住居	N－84°－W	－	７－27	弥生（後期～終末）？
ＳＢ－37	－	２本柱　竪穴住居	N－21°－W	15－11	－	弥生終末
ＳＢ－38	－	２本柱　竪穴住居	N－89°－W	15－12	－	弥生（後期～終末）？
ＳＢ－39	－	２本柱　竪穴住居	N－87°－W	15－９	－	弥生（後期～終末）？

ＳＸ16・17(Fig.11参照、およびＰＬ.3-4)

西側調査区の北東部分で検出した。遺構プランははっきりせず、全体的に浅く、一種の地形の凹みの遺物包含層であるが、ＳＤ01・02と絡みこれを切る形であるので、あるいは人為的なものである可能性もある。あるいは園池かもしれない。このＳＸ16の時期は遺物より11世紀前後と考えられ（Fig.17-29～43参照)、周囲に同時期の建物が集まり、有機的な関係が考えられる（Fig.21－Ⅳ)。ＳＸ17はＳＸ16の東側のやや深い部分である。これらの底面は凹凸があり、生痕状の小穴が多数認められ、池とする想定もあながち否定できない。

8　出土遺物

⑴土器（Fig.17・18・19、ＰＬ．８）

土器の観察については、表３の土器観察表を参照されたい。なお、須恵器の時期は小田富士雄氏の九州編年に準拠し、古代からの中世の土器の時期は、太宰府資料による各氏の編年に依拠した。古式土師器の編年は、詳細は後日に期したいが、筆者の独自のものであり、以下に簡単に説明しておく。Ⅱ期とは、在来系土器が残存しつつ消長してゆく時期で、在来系甕は丸底が大部分の段階である。既往の編年

表３　土器観察表

Fig－№	出土遺構・地区・層位など	種類/器種	遺存部位/遺存率	口径/胴部最大径 底径/器高(残存高)	成形・調整(外面) (内面)	色調	胎土	焼成	時期	備考(登録番号)
17－１	ＳD01－Ⅸ区・中～東半	須恵器/坏身	略完形(受部先欠)/1/4	12.0/(14.8？) 6.8/3.1	回転ナデ→カキメ 回転ナデ→底面ナデ	黄灰～灰色	1㎜程度の砂粒含む、精良	須恵質良好	ⅢＢ新相	(00008)
17－２	ＳD01－Ⅸ区・中～東半	須恵器/坏蓋	天井部欠損/1/8	12.0/－ －/(3.45)	回転ナデ→天井部ケズリ？ 回転ナデ	黄灰～灰色	精良	〃	ⅣＡ期	(00006)
17－３	ＳD01－Ⅸ区・西半	須恵器/坏身	略完形/1/2	10.6/13.0 7.2/3.6	回転ナデ、底部ヘラ切り状 回転ナデ、ヨコナデ	灰色	精良	〃	ⅣＡ期	(00009)
17－４	ＳD01－Ⅷ区・西半	須恵器/坏身	略完形/1/2	10.3/12.5 7.6/3.5	回転ナデ、底部ヘラ切り状 回転ナデ、ヨコナデ	灰色	1～2㎜の砂粒含む、精良	〃	ⅣＡ期	(00004)
17－５	ＳD01－Ⅸ区・西半	須恵器/高坏	坏部のみ/1/4	8.8/－ －/(3.5)	ヨコナデ、底部ケズリ ヨコナデ	灰色	1㎜以下の砂粒含む、精良	〃	ⅢＢ期？	櫛描条痕(00007)
17－６	ＳD01－Ⅸ区・西半	須恵器/長頸壷？	胴部上位～中位/1/3	－/19.3 －/(11.3)	下半タタキ→カキメ 下半タタキ→回転ナデ	外/灰白～黄灰 内/灰色	1～3㎜の砂粒含む	〃		内面ナデは擦痕強い(00012)
17－７	ＳD01－Ⅷ区・西半	須恵器/甕	胴部下半/径復元不可	－/－ －/(10.8)	タタキ→細かいカキメ 同心円文タタキ(当て具)	外/灰白 内/黄灰色	細砂粒をやや多く含む	〃		カキメの条痕は細く弱い(00010)
17－８	ＳD01－Ⅺ区・西半	土師器/甕	口縁部/1/5	18.0/－ －/(4.5)	胴部タテハケ？→ヨコナデ ヘラケズリ、口縁ヨコナデ	浅黄橙～橙色	4㎜までの花崗岩粒を含む	良好	6世紀後半	器面摩滅著しい(00024)
17－９	ＳD01－Ⅺ区	土師器？/支脚	受部/2/5	14.0/－ －/(2.5)	ナデ？ ナデ	橙～赤橙色	2㎜までの砂粒を含む	二次焼成あり	(カマドに伴うもの？)	被熱痕あり、器面剥離(00029)
17－10	ＳD01－Ⅷ区・中央	弥生土器/小形壺	略完形/2/3	15.0/9.4 3.4/8.55	摩滅不明、口縁ヨコナデ ユビオサエ、ナデ	浅黄橙色	精良、赤色粒・長石を微量	良好 黒斑有	弥生中期末～後期初頭	(00028)
17－11	ＳD02－Ⅺ区・西端	古式土師器/甕D	口縁～胴部中位/1/2	14.8/20.0 －/(12.8)	肩部ヨコハケ 胴部ヘラケズリ	灰白～浅黄橙色	1㎜以下の砂粒を多く含む	普通	ⅡＢ期	口縁部回転ヨコナデ　精製品(00047)
17－12	ＳD02－Ⅹ区・西半	古式土師器/高坏	坏部のみ/1/4	23.7/－ －/(6.1)	ヘラミガキ？ 内外とも摩滅し不明	外/赤橙色 内/浅黄橙色	水こし精良	良好 黒斑有	ⅡＡ期	外来系、庄内－布留範型(00045)
17－13	ＳD02－Ⅴ区・南半	弥生土器？/高坏	脚柱状部のみ	柱状部径4.6 －/(12.6)	内外とも摩滅し不明	浅橙～灰白色	精良	普通	弥生終末～古墳初頭	在来系(00044)
17－14	ＳD02－Ⅺ区・東ベルト	古式土師器/高坏	坏底部のみ	柱状部径4.7 －/(2.0)	タテハケメ→ナデ？ 摩滅し不明	浅黄橙色	0.5～5㎜の長石・石英含む	普通	古墳初頭か	在来系(00041)

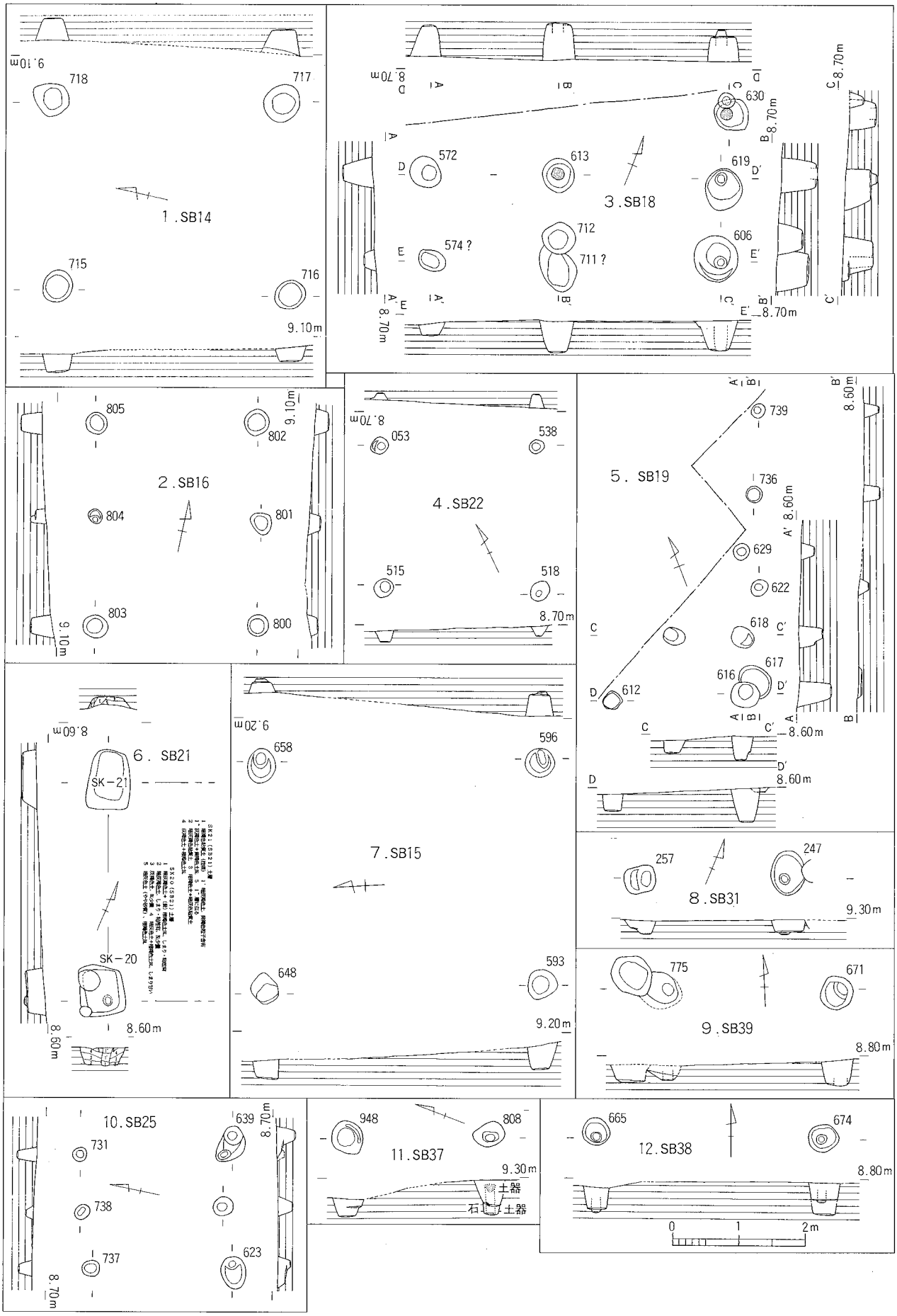


Fig.15　掘立柱建物実測図Ⅲ（1/80）

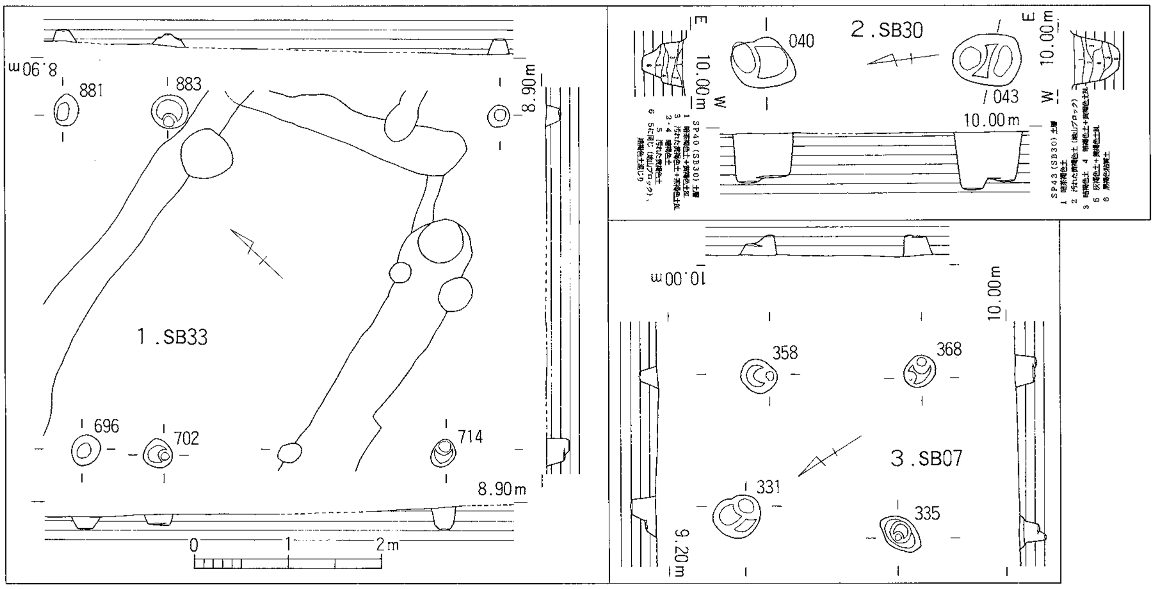


Fig.16 掘立柱建物実測図Ⅳ（1/80）

●表３（つづき）

17－15	SD02－Ⅺ埦	古式土師器/埦状高坏	脚柱状部のみ	柱状部径3.95 ／(3.75)	ヘラナデ(ミガキ？) シボリ	浅橙 白色	水こし精良	良好	ⅡA期か	外来系(00037)
17－16	SD02－Ⅺ区及びSP920	古式土師器/脚付鉢	脚部	脚裾部径9.2 －/(2.05)	内外とも摩滅し不明	赤橙 橙色	水こし精良	良好	古墳初頭	上面刻み接合痕、精製品(00132)
17－17	SD02－X区・西ベルト	古式土師器 小形丸底坩	口縁～体部中位/1/4	11.8/10.35 －/(4.2)	くびれ部にタテハケ残る 内外摩滅し不明	黄橙色	水こし精良	良好	ⅡB期か	外来系、精製品(00030)
17－18	SD02－X区・西半	古式土師器/小形器台	受部のみ/1/8	8.95？/－ －/(1.9)	摩滅不明(ヨコミガキ？) タテの細かいミガキ？	浅橙色	水こし精良	良好	ⅡB期－ⅡC期	外来系、精製品(00042)
17－19	SD02－X区・西半	古式土師器/鉢	口縁～体部中位/1/8	19.5/19.15 －/8.85	内外とも摩滅し不明	浅黄橙色	精良、2～3mmの砂粒含む	普通 黒斑有	古墳初頭か	在来系か(00046)
17－20	SD02－X区・西半	古式土師器/壺	底部/1/3	現存最大径16.85 －/(4.2)	押捺痕あり、ハケメ？ 押捺、ナデ	外/赤橙色 内/浅黄橙色	1～5mmの長石、花崗岩含む	やや不良	古墳初頭	在来系、広いレンズ底(00043)
17－21	SD03	古式土師器/小形器台	受部底～脚部上部	くびれ部位3.0 －/(3.0)	内外とも摩滅多し不明	灰色	精良、1mm以下の砂粒含む	やや不良	古墳初頭	外来系、やや粗製のもの(00038)
17－22	SD03	古式土師器/高坏	柱状部	柱状部径3.9 －/(6.2)	ヘラナデか シボリか	浅黄橙～灰白色	1mmまでの砂粒を多く含む	普通	古墳初頭	外来系、小形の高坏 雑な調整(00039)
17－21	SD03・R－1	古式土師器/脚付鉢	鉢底部～脚部	脚底部位8.0 －/(2.9)	摩滅し不明 横のナデか	浅橙色	水こし精良	良好	古墳初頭	外来系、精製品(00033)
17－24	SD03・R－3	古式土師器/脚付鉢	脚部/1/2	脚裾部位8.0 －/(1.3)	ヘラミガキ？ 内外摩滅し不明	浅橙色	水こし精良	良好	古墳初頭	外来系、精製品(00035)
17－25	SD03	古式土師器/脚付鉢	鉢底部～脚部(裾部欠)	くびれ部径4.4 －/(3.8)	押捺、ナデ シボリ？、押捺、ナデ	浅黄橙色	5mmまでの石英・長石含む	良好	古墳初頭	在来系、粗製(00040)
17－26	SD03	古式土師器/小形丸底壺	口縁～体部中位	9.35/9.8 －/(5.0)	くびれ部にハケメ残る 内外摩滅し不明	浅橙～灰白色	3mmまでの花崗岩等含む	良好 黒斑有	ⅡA－ⅡB期	胎土は粗製、外来系(00036)
17－27	SD03・R－2	古式土師器/脚付鉢	鉢底部～脚部/1/3	脚裾部径10.0 －/(2.6)	ヘラミガキ？ 内外摩滅し不明	浅橙～橙色	水こし精良	良好	ⅡA期	外来系、精製品(00034)
17－28	SD03	古式土師器/甕D	口縁部下半～胴部肩/1/4	くびれ部径13.2 －/(5.4)	摩滅不明(回転ヨコナデ) 胴部ヘラケズリ	(浅)黄橙色	精良、微砂粒を含む	良好	ⅡA期	外来系、器面摩滅著しい(00032)
17－29	SD01－XⅣ区(SX16か)	土師器/埦	口縁～体部中位/1/8	13.0/－ －/(3.1)	ヨコナデ ヨコナデ	浅黄橙～灰白色	精良	良好	10世紀後半頃？(～11世紀)	高台付か(00022)
17－30	SD01－Ⅺ区(SX16か)	土師器/高台付埦	体部下半～台部/1/3	－/－ 高台径7.8/(3.7)	ヨコナデ ナデ、ヨコナデ	浅橙～灰白色	精良	良好	11世紀頃	(00019)
17－31	SD01－Ⅺ区(SX16か)	土師器/高台付埦	体部下位～台部/1/4	－/ 高台径6.4/(2.9)	工具ヨコナデ、ミガキ？ ナデ	灰白色	精良	良好	11世紀後半頃？	(00017)
17－32	SD01－Ⅺ区(SX16か)	黒色土器A/高台付埦	体部下位～台部/1/3	－/－ 高台径7.8/(2.3)	底部上に沈線状、ヨコナデ ミガキ？(摩滅不明)	外/橙色 内/黒色	精良	良好	11世紀後半～12世紀前半か	内黒顕著(00016)
17－33	SX16(SD01？)	須恵器/坏身	口縁～体部上半/1/8	12.0/ －/(2.6)	ヨコナデ、回転ナデ ヨコナデ	黄灰～灰色	精良	須恵質 良好	ⅣA期か	(00005)
17－34	SX16(SD01？)	須恵器/高坏	脚裾部/1/8	脚裾部径11.4 －/(1.25)	ヨコナデ ヨコナデ	灰～青灰色	精良	須恵質 良好		(00013)
17－35	SX16	黒色土器A/埦	底部欠損/1/3	15.0/－ －/(4.8)	ヨコナデ、ヘラヨコナデ ミガキ？摩滅し不明	外/灰白色 内/黒灰色	精良	良好	11世紀	高台付だろう(00018)
17－36	SX16	黒色土器B/高台付埦	体部下半/1/2	－/－ 6.0/(2.6)	高台貼付後ヘラミガキ ヘラミガキ(ヨコナデ後)	黒色(地の色は暗灰色)	精良	良好	11世紀頃か	高台剥離、底部ヘラ切り(00021)
17－37	SX16	黒色土器A/埦	口縁～体部中位/1/8	13.0/－ －/(3.1)	体部工具ヨコナデ(凹線) ミガキ？(摩滅不明)	外/灰白色 内/暗灰色	精良	良好	10世紀後半か	焼成不良の瓦器埦か？(00014)
17－38	SX16	土師器/高台付埦	略完形/1/8	12.0/－ 6.3/3.65	ヨコナデ、底部ナデ ナデ？	淡橙～浅橙色	精良	良好	11～12世紀か	底部一部欠損(00129)
17－39	SX16	土師器/埦	口縁～体部中位/1/8	－/－ /(4.7)	ヨコナデ ヨコナデ、ナデ？	浅橙～灰白色	水こし精良	良好	11世紀	高台付だろう(00023)
17－40	SX16	土師器/小皿	底部/1/4	－/－ 8.0/(1.0)	ヨコナデ、底部ヘラ切り 回転ナデ	灰白～浅黄橙色	水こし精良	良好	12世紀初頭	板目圧痕？(00020)
17－41	SX16	土師器/小皿？	底部～体部下半/1/3	/ 6.6/(1.8)	ヨコナデ、底部ヘラ切り ナデ	灰白色	精良	良好	10世紀末頃？	坏の可能性もある(00015)
17－42	SX16	黒色土器A/高台付埦	底部～台部/2/3	高台径7.5 －/(1.6)	ヨコナデ ミガキ？	外/灰白色 内/黒灰色	水こし精良 砂粒微量	良好	11世紀頃か	(00011)
17－43	SX16	須恵器/鉢か？	底部付近	径復元不可 －/(6.8)	タタキ→回転ヘラナデ 押捺→回転ヘラナデ	灰白～灰色	精良、黒色粒子を多く含む	良好	平安中期か	産地不明、底外面ケズリ(00027)
17－44	SX16	土師器/甑	把手部	器壁から5.2 高さ5.55、厚さ3.25	ユビナデ	(淡)橙色	2mmまでの砂粒多、粗い	良好	6～7世紀？	(00025)
18－45	SD20コーナー部	古式土師器/甕A	口縁～胴部中位/1/6	24.6/－ /(16.4)	タテハケ、口縁ヨコナデ弱 摩滅し不明	浅橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	ⅡA期	頸部小突帯、口縁部歪む(注口？)(00096)
18－46	SD20コーナー部	古式土師器/甕A	胴部中位～底部/2/3	/24.75 /(15.1)	ナデ？ ナデ？(摩滅不明)	外/浅橙色 内/橙灰色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	ⅡA期	45と同一個体、丸底(00085)
18－47	SD20コーナー部	古式土師器/甕A？	口縁～胴部中位/1/5	19.0/28.7 －/(16.5)	タテハケ ナデ？口縁端部ヨコナデ	赤橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	ⅡA期	壺の可能性もある(00090)
18－48	SD20－Ⅱ区	古式土師器/甕A？	底部付近/1/2	－/－ 6.1/(4.55)	押捺あり ヘラナデ？	赤橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通 黒斑有	ⅡA期	47と同一個体か、広いレンズ底、在来系(00091)
18－49	SD20コーナー部	古式土師器/高坏	坏部の一部/径復元不可	－/－ －/(6.65)	ハケメ→ヨコナデ？ 摩滅し不明	外/赤橙色 内/浅橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	古墳初頭	在来系(00095)
18－50	SD20コーナー部	古式土師器/高坏	坏部上半/径復元不可	－/－ /(4.6)	内外摩滅し不明	橙色	水こし精良 砂粒微量	良好 黒斑有	ⅡA期	外来系(00094)
18－51	SD20－Ⅱ区	古式土師器/山陰系甕	口縁部小片/径復元不可	－/－ －/(4.3)	回転的なヨコナデ 回転的なヨコナデ	浅橙色	1mm程度の砂粒を含む	普通	ⅡA期	精良な胎土、北部九州産(00093)
18－52	SD20コーナー部	古式土師器/手捏ね埦	ほぼ完形	8.8/－ －/3.3	ナデ、押捺 (内外摩滅し不明瞭)	赤橙色	3mmまでの砂粒を含む	普通		(00092)
18－53	SD20コーナー部	古式土師器/杓子形	把手部	器壁から6.5 高さ4.05/厚さ1.8	ナデ	赤橙色	1mm程度の砂粒を含む	普通		埦部欠落(00086)
18－54	SD20コーナー部	古式土師器/甕A	略完形/3/4	11.5/11.65 /13.0	ケズリ→ヘラナデ ナデ、ケズリ	赤橙～灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	普通 黒斑有	ⅡA期	在来系(00089)
18－55	SD20コーナー部	古式土師器/甕A	口縁～胴部上半/1/4	17.3/17.9 －/(8.2)	タテハケ→左上ハケ 左上ハケ、口縁線ハケ→ナデ	外/灰黄色 内/黒灰色	3mmまでの砂粒を含む	普通	ⅡA期	在来系、口縁線端部面取り若干(00087)
18－56	SD20コーナー部	古式土師器/甕A	胴部下半～底部	/ 2.2/(6.3)	タテハケ(摩滅不明瞭) 底部押捺、ナデ→ハケメ	外/灰黄色 内/浅橙色	1mm程度の砂粒を含む	普通	ⅡA期	55と同一個体か、丸底に近いレンズ底(00088)
18－57	SE05－下層	古式土師器/甕A	口縁～胴部上半/1/6	15.6/ /(8.9)	ハケメ、口縁線部ヨコナデ有 ハケ→ナデ、口縁ヨコハケ	赤橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	ⅡA－ⅡB期	在来系、口縁線端部丸味あり(00054)
18－58	SE05－下層	古式土師器/甕A	底部付近/1/4	－/ 5.9/(5.35)	(タタキ押圧→)ハケメ ハケ？(摩滅不明)	赤橙色	2mmまでの砂粒を含む	普通 黒斑有	ⅡA－ⅡB期	57と同一個体か、広い丸底(00055)
18－59	SE05－最下層	古式土師器/手捏ね埦	ほぼ完形	7.0/ －/3.4	ナデ、押捺 ナデ	赤橙～灰橙色	3mmまでの砂粒を含む	普通	ⅡA－ⅡB期	注口あり(00059)
18－60	SE05－上層	古式土師器/小形器台	脚部/2/3	脚裾部径10.2 －/(4.2)	内外摩滅不明 (ナデ？)	外/赤橙色 内/灰橙色	2mmまでの砂粒を多く含む	普通	古墳初頭か	脚付鉢の可能性もあり 系統不明確(00051)
18－61	SE05－下層	古式土師器/手捏ね埦	ほぼ完形	7.4/－ 3.4/3/6	ナデ、押捺(摩滅不明) ハケメあり、ナデ	赤橙色	1mm程度の砂粒を含む	普通 黒斑有		(00050)
18－62	SE05－下層	古式土師器/広口壺	頸部～胴部中位/1/4	－/17.6 －/(12.2)	(タタキ？→)ハケメ→ナデ ハケメ→ナデ(摩滅不明瞭)	赤橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通	ⅡB期か	短頸のタイプか、技法は伝統的Ⅴ様式系(00056)
18－63	SE05－最下層	古式土師器/脚付鉢？	脚部/2/3	脚裾部径4.2 －/(2.8)	内外摩滅不明	赤橙色	3mmまでの砂粒を多く含む	普通		(00049)
18－64	SE05－上層	古式土師器/小形鉢	口縁端部欠損 略完形1/2	－/－ 3.3/(4.9)	摩滅不明、底部押捺 ハケメ、ナデ	浅橙色	3mmまでの砂粒を含む	普通 黒斑有		(00048)
18－65	SE05－下層	古式土師器/小形鉢	略完形/1/3	11.4/－ 4.6/4.3	ナデ？(摩滅不明) 粗いナデ	赤橙色	2mmまでの砂粒を含む	普通 黒斑有		底部輪台充填系(00057)

●表3　（つづき）

18-66	SE05　最下層	古式土師器/鉢	ほぼ完形	12.8/ 3.1/4.8	ハケメ→ナデ？(摩滅) 底部ハケ残る、ナデ	灰白色	2㎜までの砂粒を含む	普通 黒斑有		底部輪台充填(00052)
18-67	SE05	古式土師器/鉢	略完形/1/2	14.5/ 5.8/5.1	内外摩滅不明	外/浅橙色 内/赤橙色	細砂粒、石英・長石含む	普通 黒斑有		在来系丸底(底部円板か)(00053)
18-68	SE05	古式土師器/高坏	坏部/1/4	22.6/ /(6.95)	一部ハケ残る、坏底部削り 摩滅不明(内外)	外/浅橙色 内/橙色	精良、石英・長石含む	良好	ⅡA　ⅡB期	外来系、庄内　布留新型(00058)
18-69	SE05　最下層	古式土師器/大型壺	口縁部/1/6	37.2/ /(12.5)	頸部ナデ、口縁横ハケ ヨコナデ、横ハケ	橙色	5㎜までの花崗岩、石英有	良好	ⅡA　ⅡB期	在来系、大型複合口縁壺 70と同一個体(00106)
18-70	SE05一上層～最下層	古式土師器/大型壺	胴部中位やや下の一部	/(16.4)	ハケメ→突帯貼付 ナナメハケ、ヨコハケ	橙色	同上	良好 黒斑有		破片多いが接合困難、突帯はハケ工具先端刻み(00111)
18-71	SE01	古式土師器/小形高坏	脚部のみ/2/3	脚裾部径8.4 /(5.65)	タテのヘラナデ ナデ、裾部ヨコナデ	浅赤橙色	精良、細砂粒含む	良好	古墳初頭か	外来系(00103)
18-72	SP560(＝SB11)	古式土師器/甕Cか	口縁部/1/8	14.9/ /2.6	口縁ヨコナデ、(摩滅不明) 口縁ヨコナデ	淡黄橙色 (断面黒灰色)	細砂粒やや多 (石英・長石)	普通	ⅡA期	庄内甕か(比恵遺跡か)(00141)
18-73	SE02　上層	土師器/椀	口縁部小片	/(3.6)	ヨコナデ(およびミガキ？) ヨコミガキ？(摩滅不明)	淡黄橙色	精良	良好	11世紀か	(00104)
18-74	SP682	土師器/小皿	略完形/1/4	9.3/ 7.7/1.15	ヨコナデ？底部摩滅不明 ナデ	浅橙色	1㎜程度の砂粒を含む、密	良好	13世紀頃	(00130)
19-75	SD34一Ⅲ区	古式土師器/小形丸底壺	口縁～胴部中位/1/6	10.5/8.5 /(5.2)	内外摩滅不明	外/浅橙色 内/灰橙色	精良、細砂粒わずかに含む	良好	ⅡC期	精製品、水こし胎土(00075)
19-76	SD34	古式土師器/小形器台	脚部～受部底/2/3	脚裾部径10.8 /(6.9)	内外摩滅不明	橙～淡橙色	精良、石英・長石含む	良好	ⅡB期か	精製品、水こし胎土、2孔(00074)
19-77	SD34　Ⅲ区及びSP814	古式土師器/小形丸底鉢	略完形/2/3	11.1/ /5.15	内外摩滅不明(ナデ？)	赤橙色～灰褐色	1㎜程度の砂粒を含む	普通	ⅡB期か	在来系範型による模倣鉢(00109)
19-78	SD35一Ⅱ区	古式土師器/小形器台	脚部(裾部欠損)	/(4.8)	内外摩滅不明	浅黄橙白色	細砂粒含む、精良	良好	ⅡB期か	孔数不明(00076)
19-79	SD36	古式土師器/小形丸底壺	口縁部/1/4	13.1/ /(3.3)	摩滅不明(ヨコナデ？)	浅橙色	水こし精良、石英含む	良好	ⅡB期　ⅡC期	(00067)
19-80	SD35	古式土師器/有孔鉢	口縁部欠損	/ 4.7/(4.5)	ハケ→ナデか ハケ、ナデ、押捺	浅黄橙　灰橙色	3㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡA期か	焼成前　孔か、孔径1.2㎝ 伝統的V様式系(00077)
19-81	SD36一Ⅲ区	古式土師器/小形丸底壺	口縁～体部中位/1/4	11.8/ /(6.3)	口縁回転ヨコナデ？(摩滅) 摩滅不明	淡橙色	水こし精良 細砂粒含む	良好	ⅡC期	外来(布留)系(00062)
19-82	SD36一Ⅳ・Ⅴ区	古式土師器/小形丸底壺	口縁～体部下方/1/5	11.1/ /(6.7)	体部ケズリ→ナデ？(摩滅) 体部ケズリ、摩滅不明瞭	浅黄橙白色 (灰白色系)	水こし精良	良好	ⅡC期	外来(布留)系(00063)
19-83	SD36一Ⅱ区	古式土師器/小形丸底壺	口縁～体部下位/1/5	くびれ部径　7.9 /(6.3)	摩滅不明 口縁ヨコナデ、(摩滅)	橙色	精良、石英・長石含む	良好	ⅡC期	外来(布留)系、口縁端部欠(00061)
19-84	SD36一北＋SD36一Ⅱ区	古式土師器/甕A	口縁部(1/6)～胴部(1/2)	16.6/20.2 /(17.5)	タテハケメ(～口縁部) (ハケメ？→)ナデ	淡橙～灰橙色	細砂粒を多く含む	普通 黒斑有	ⅡB　ⅡC期	在来系、口縁ヨコナデ弱い 底部欠失(00072)
19-85	SD36　Ⅱ区	古式土師器/甕A(D)	胴部～底部/2/3	/17.55 /(16.3)	タテハケ、ヨコハケ ハケメ若干、ナデ	外/浅橙色 内/橙灰色	1㎜程度の砂粒を多く含む	普通 黒斑有	ⅡC期	甕A技法による甕Dの模倣(00073)
19-86	SD36一Ⅵ区	古式土師器/甕D	口縁部/1/5	18.2/ /(3.7)	回転的なヨコナデ 回転的なヨコナデ	浅橙色	1㎜程度の砂粒を含む	普通	ⅡC期	外来系(00064)
19-87	SD38	古式土師器/甕D	口縁部～胴肩部/1/4	17.4/ /(7.3)	胴部ハケ？、口縁ヨコナデ 胴部ケズリ、回転ヨコナデ	外/浅橙 内/浅橙白色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡC期	外来系、口縁端部面取り気味、口縁外面ヨコハケ痕跡(00084)
19-88	SD36一Ⅲ区・西半下層	古式土師器/甕A(D)	口縁～胴部上位/1/5	(18.0)/ －/(8.0)	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ 胴部ケズリ	淡橙～灰橙色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡC期	85と同様だがより精巧、回転ヨコナデではない(00070)
19-89	SD36一Ⅲ区	古式土師器/甕D	口縁～胴部上半	17.4/24.9 /13.5	胴部タテハケ→ヨコハケ 胴部ケズリ、口縁ヨコナデ	浅黄橙～灰白色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡC期	ヨコナデは回転的、擦痕あり 肩部沈線文(00071)
19-90	SD36一Ⅲ区	古式土師器/小形鉢	底部のみ欠損/1/3	12.3/－ 3.3/(3.0)	内外摩滅不明	淡橙～灰白色	精良、石英・長石含む	良好		在来系(00066)
19-91	SD36一Ⅲ区・中～東区	古式土師器/小形鉢	底部一部欠損/1/6	12.5/－ 4.4/(3.5)	内外摩滅不明	外/灰～黒灰 内/赤橙色	2㎜までの砂粒を含む	普通		在来系(00068)
19-92	SD36一Ⅵ区	古式土師器/小形鉢	ほぼ完形	11.8/－ 3.5/3.25	口縁部やや下ヨコヘラナデ 内外摩滅不明	赤橙～灰褐色	細砂粒含む やや精良	普通		在来系(00060)
19-93	SD36一Ⅲ区	古式土師器/甕D	口縁～胴部中位/1/4	17.5/19.9 －/(13.4)	胴部タテハケ残る 内外摩滅不明	浅橙色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡB－ⅡC期	外来系(00069)
19-94	SD38	古式土師器/甕D	口縁～胴部中位/1/4	16.5/ －/(5.5)	口縁回転的ヨコナデ 胴部ケズリ、内外摩滅不明	浅橙～灰白色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	ⅡC期	外来系、87と同一個体の可能性あり(00083)
19-95	SD38一南区・下層	古式土師器/小形丸底鉢	口縁～体部上半/1/5	12.0/－ /(3.85)	タテハケ頸部残る 口縁ヨコヘラナデ痕	橙～淡橙色	精良、長石・石英含む	良好	ⅡB　ⅡC期	外来系、水こし胎土 内外摩滅調整不明(00081)
19-96	SD38一ベルトⅡ	古式土師器/埦	略完形/1/4	9.6/－ 5.0/4.0	ナデ・押捺(摩滅不明) 押捺痕、ナデ？	外/灰白色 内/浅橙色	2㎜までの砂粒を含む	普通		手捏ね的(00082)
19-97	SD37一南区	古式土師器/長頸壺	口縁部/1/3	21.6/－ －/(8.8)	内外摩滅不明 ハケ→ナデ→ヨコナデ？	浅橙～灰橙色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	古墳前期	技法は在来系的(00078)
19-98	SD38	古式土師器/小形鉢	ほぼ完形	12.4/－ 3.0/4.2	ハケメ ハケメ	外/赤橙色 内/橙灰色	細砂粒を多く含む	普通	ⅡA－ⅡB期	伝統的V様式系輪台充填(00079)
19-99	SD36？(SP700か)	土師器/小皿？	体部上半欠損/1/4	－/－ 7.8/(0.55)	回転ナデ？(底部摩滅) 回転ナデ	淡橙色	精良、細砂粒含む	良好	12世紀後半？	底部は糸切りの可能性あるが不明(＝SB12?)(00065)
19-100	SK10	土師器/坏	略完形 1/4	12.7/－ 7.3/3.5	ヨコナデ・ミガキ？ ヨコナデ、ナデ	外/赤橙色 内/淡赤橙色	水こし精良、長石、雲母含む	良好	8世紀末～9世紀初め？	底部はヘラ切りか(00099)
19-101	SP20(＝SB26)	土師器/甕	口縁～胴部上位/1/4	27.8/ －/(6.3)	口縁ヨコナデ、胴部不明 胴部ケズリ、口縁ヨコナデ	赤橙色～灰褐色	3㎜までの砂粒多、雲母含む	普通	8世紀後半～末頃	(00110)
19-102	SD17	弥生土器/短頸壺	口縁部小片/径復元不可	－/－ －/(5.0)	口縁ヨコナデ、胴部不明 口縁ヨコナデ、胴部不明	外/浅橙色 内/浅橙白色	細砂粒多を多く含む	普通	須玖Ⅱ式	(00139)
19-103	SD17一中区	弥生土器/甕？	底部のみ/1/2	－/ 8.0/(4.2)	摩滅不明 押捺、ナデ	浅橙色	細砂粒多く含む、長石、雲母	普通	須玖Ⅱ式	(00138)
19-104	SP808一柱抜痕層(＝SB37)	弥生土器/大形鉢	略完形/2/3	23.4/－ －/11.4	タテハケ→ナナメハケ ナナメ板ナデ(ハケメ？)	浅黄橙～橙灰色	1㎜程度の砂粒を多く含む	普通	弥生終末	古墳初頭になる可能性あり、丸底に近いレンズ底(00108)
19-105	SD09	弥生土器/器台	裾部のみ/1/4	－/－ 18.6/(6.4)	タテハケ→裾部ヨコナデ 摩滅不明	外/赤橙色 内/灰黄色	3㎜までの砂粒多、粗い	普通	弥生後期後葉～終末	(00100)
19-106	SK08	弥生土器/器台	体部～裾部/1/4	－/ 8.6/(9.4)	ナデ ナデ	浅橙色	精良、細砂粒多、長石、雲母	普通	弥生中期か	(00101)
19-107	SP715一下層(＝SB14)	弥生土器/筒形器台	小突起欠損/2/3	脚裾部径12.4 －/(10.1)	タテハケ ナナメハケ	外/灰橙色 内/黒灰色	1㎜程度の砂粒を多く含む	普通	弥生終末(～古墳初頭)	在来系(00107)
19-108	SC01一Ⅱ区・北半	弥生土器/甕	口縁～脚部上位/1/6	くびれ部径21.0/21.3 －/(7.5)	タテハケ(摩滅気味) ナナメハケ、口縁ヨコナデ	外/浅橙色 内/橙灰色	2㎜程度の砂粒を多く含む	普通	弥生後期後葉～終末	口縁端部欠損、SC01の時期ではない？(00136)
19-109	SP646	弥生土器/鉢	略完形/1/2	11.2/－ －/6.1	ハケメ、口縁ヨコナデ？ ナデ？(内外摩滅不明)	赤橙色	1㎜程度の砂粒を多く含む	普通	弥生終末(古墳初頭？)	尖底気味丸底、在来系(00128)
19-110	調査区採集品	古式土師器/小形器台	脚部欠損	受部径6.9 －/(3.9)	ナデ？(摩滅不明) 押捺、ナデ	外/灰橙白色 内/浅橙色	2㎜までの砂粒を多く含む	普通	弥生終末(Ⅰ期)～(ⅡA)期	伝統的V様式系に伴う粗製品(00131)
19-111	SX01	弥生土器/脚付鉢	脚部のみ(端部1/4)	脚裾部径7.4 /(3.1)	摩滅不明 押捺、ナデ	赤橙色	3㎜までの砂粒を多く含む	普通	弥生終末	在来系(00134)
19-112	SK02	弥生土器？/手捏ね埦	完形	5.0/－ －/1.9	押捺、ナデ 押捺、ナデ	赤橙色	3㎜までの砂粒を多く含む	普通	弥生終末頃か	(00102)
19-113	SD40一西土坑	古式土師器/ミニチュア	受部欠損	脚裾部径3.5 －/(2.8)	ナデ ナデ	浅黄橙色～灰白色	細砂粒含む、やや精良	良好	古墳前期？	小形器台のミニチュアか(00080)
19-114	SP287一B(＝SB09)	弥生土器/小形壺	底部～胴部中位/2/3	/11.0 5.5/(7.9)	ナデ？底部上ヘラナデか ナデ？(摩滅不明)	黒灰色	1㎜程度の砂粒を含む、密	不良？	弥生中期後半(須玖Ⅱ)	底部外面はケズリ、内面底部は表面剥落(00097)
19-115	SP287一A(＝SB09)	弥生土器/壺？	底部のみ	－/－ 7.0/(3.1)	内外摩滅不明	浅橙色	3㎜までの砂粒を多く含む	普通	須玖Ⅱ式？	(00098)
19-116	SP315(＝SB09)	弥生土器/壺	底部のみ	－/－ 6.1/(3.2)	内外摩滅不明	浅黄橙色～灰白色	3㎜までの砂粒を多く含む	普通	須玖Ⅱ式？	(00142)
19-117	SK01一下層(＝SB09)	須恵器/長頸壺？	頸部直下肩部小片	－/－ －/(3.1)	カキメ後ナデ タタキ当て具痕(同心円)	灰色(明青灰色)	精良、長石を若干含む	良好	8世紀頃？	(00105)
19-118	SK31？(SX16？)	滑石製品/鍋	口縁部小片	－/－ －/(7.9)	ケズリ後ミガキか ケズリ	(銀灰色)	―	・	11世紀頃？	内面粗く、外面平滑な調整(00144)
19-119	SP161(＝SB05)	ミニチュア土器/不明	製品の一部か(剥落？)	柱状部径1.7 －/2.0	手捏ね的	橙～黄橙色	2㎜までの砂粒、石英、長石	普通	時期不詳	あるいは土馬のような鍵形品の一部？(00003)

表4　石器観察表（Fig－20）

番号	器種	長さ/幅/厚さ（cm）※（　）は残存値	材質	遺存度	出土遺構・層位等	備考
1	ナイフ形石器	(2.5) /1.1/0.5	黒曜石	先端部欠損	調査区内採集	
2	石鏃	(1.7) /1.5/0.5	ガラス質安山岩	先端部欠損	SD－40東土坑	混入品、縄文早期？
3	石鏃	(1.1) /1.1/0.2	黒曜石	先端部・側縁欠損	SK－45	混入品、縄文早期？
4	石鏃	(1.4) / (1.2) / (0.3)	黒曜石	脚部のみ	SK－45	混入品、縄文早期？
5	石鏃	2.6/1.2/0.4	黒曜石	片脚一部欠損	調査区内採集	弥生時代か
6	石鏃	(2.3) /1.8/0.5	黒曜石	先端部欠損	調査区内採集	縄文早期？
7	石鏃	(2.1) / (1.3) /0.3	黒曜石	先端部・片脚欠損	調査区内採集	縄文時代？
8	砥石	(9.3) / (5.5) / (3.0)	砂岩	一辺欠損	SX－16	
9	砥石	(10.8) / (5.4) / (2.3)	粘板岩	破片	SP－803	
10	凹石	9.0/8.5/4.1	砂岩	完形	SC－01 Ⅳ区	
11	凹石	13.7/12.7/4.8	閃緑岩	完形	SD－01 Ⅳ区西半	
12	凹石	15.3/11.5/5.9	結晶斑岩（花崗岩）	完形	SD－02 Ⅳ区	敲石・砥石としても利用
13	石錘	3.8/2.2/1.9	滑石	完形	SX－01	弥生終末
14	石錘	(12.0) / (7.0) / (5.3)	滑石（蛇紋岩？）	破片	SP－300	（古墳前期？）
15	不明品（石錘？）	8.9/6.3/1.9	滑石？	完形	SD－02 Ⅹ区西端	四周に敲打痕
16	硯？	(1.6) / (4.9) / (0.8)	粘板岩	上縁のみ	SD－34 Ⅰ区？	混入品か

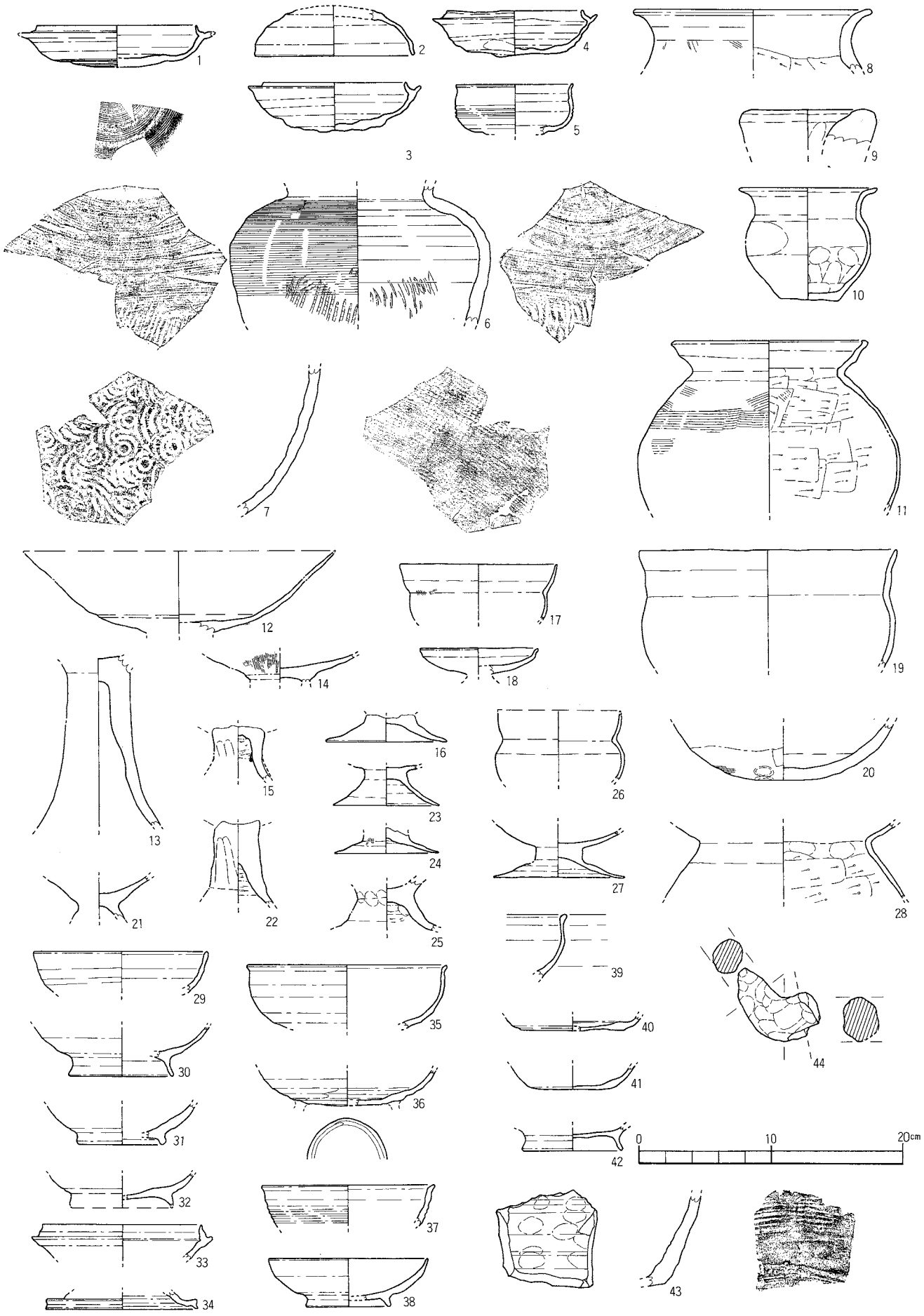


Fig.17　土器実測図Ⅰ（1/4）

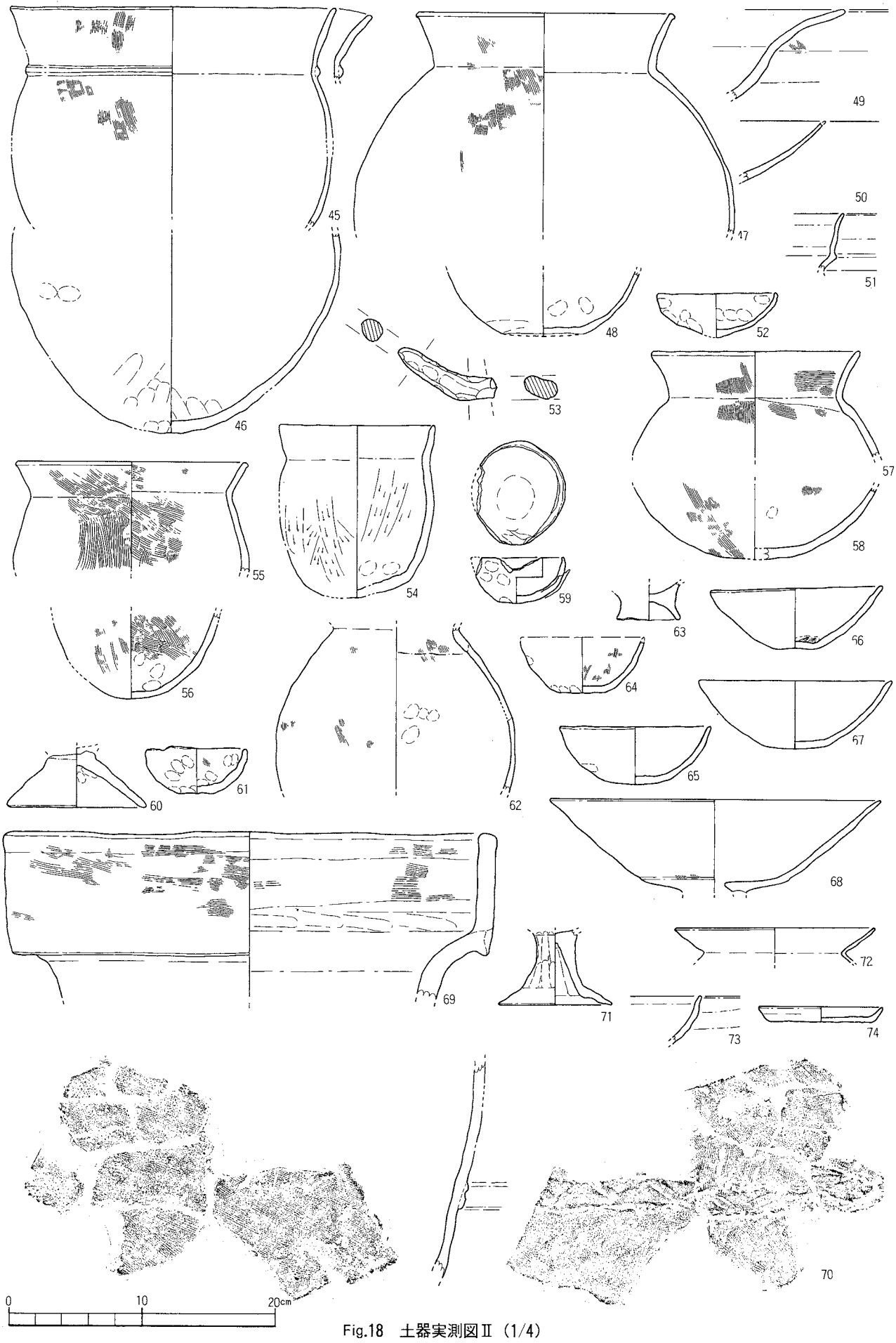


Fig.18　土器実測図Ⅱ（1/4）

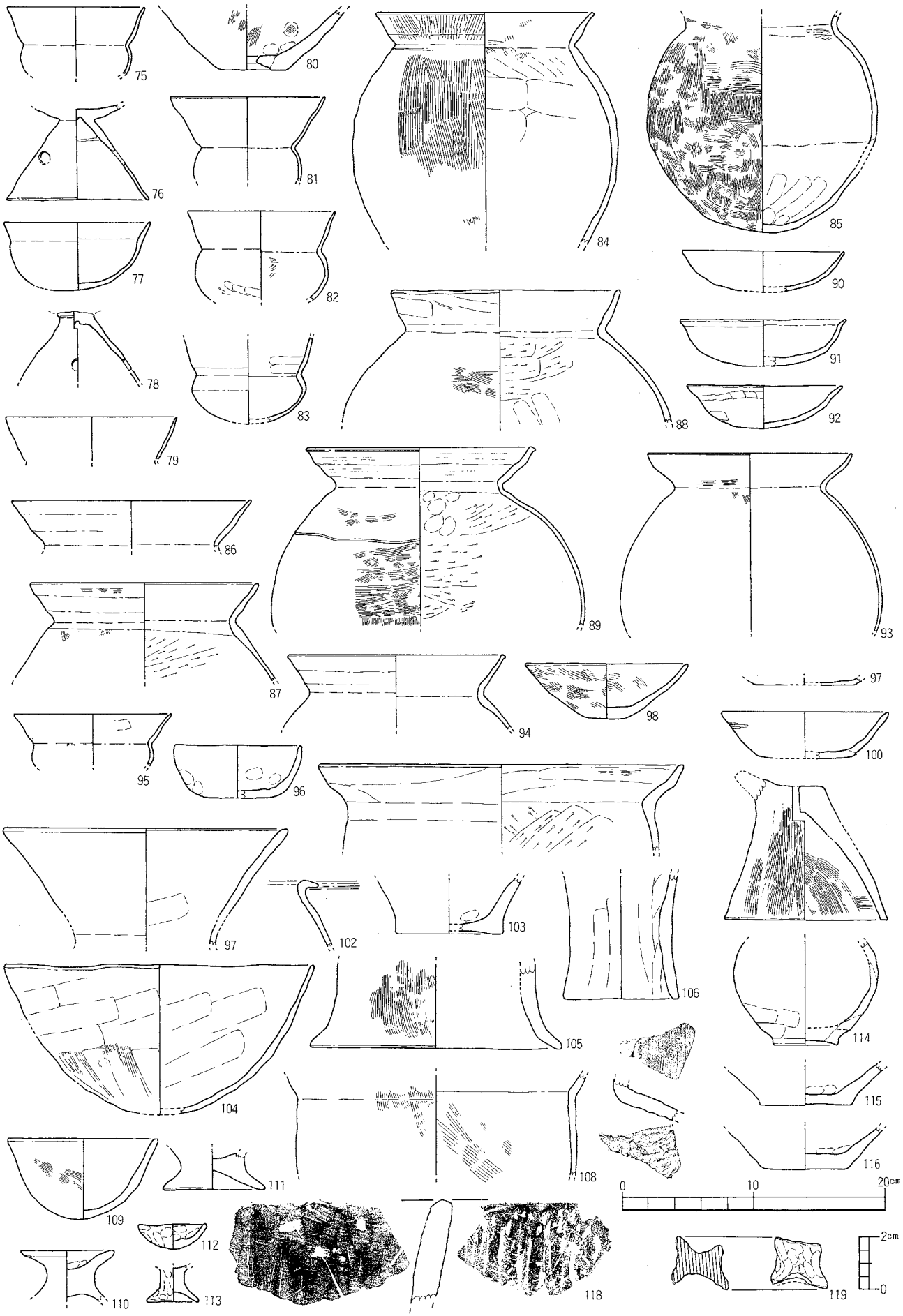


Fig.19　土器実測図Ⅲ（1/4）

Fig.20　石器（1/1･2/3･1/3），鉄器（1/2）　実測図

との対照では、ⅡA期は柳田康雄氏の編年のⅡａ、幾内の布留０式（纏向３式）に、ⅡB期は同じくⅡａの一部とⅡｂの古相、布留Ⅰ式古相に、ⅡC期は同じくⅡｂの新相、布留Ⅰ式新相から布留Ⅱ式古相にそれぞれ対応するものである。SD20（在来系主体）とSD03（外来系主体）がⅡA期の、SE05（両者混在）がⅡB期の、SD36がⅡC期の一括資料である。なおⅠ期は、在来系主体の時期で、甕はレンズ底または尖底で（丸底は少量）、むしろ弥生終末である。甕の形式分類で、Aは在来系、Cは庄内甕、Dは布留系甕であり、A（D）とは甕Aの技法で甕Dを模倣したものを指す。

⑵**石器**（Fig.20-1～16）

これらの観察については表４を参照されたい。このうち16は硯のようだが、出土遺構はSD34とするが、これは誤りで他の遺構の混入品であろう。他の石器・石製品も、厳密に出土遺構に伴うと考えられるのは少ない。なお表４の作成には、田上勇一郎・吉留秀敏の御協力を賜った。

⑶**鉄器**（Fig.20-17・18）

17は刀子である。SK12（撹乱）から出土。古墳時代以降のものである。茎の大部分と刃部の推定1/２程度を欠失する。残存長5.7cm、最大幅2.0cm。背の厚みは3.5-4.5mm。保存状況は良好。18は鉄鏃でSD34のⅡ区から出土。弥生終末から古墳初頭のやや大形の平根鏃の基部片である。基部下辺が内湾する。幅3.35cm、残存長2.1cm、厚みは5－6mmを測る。錆が著しい。

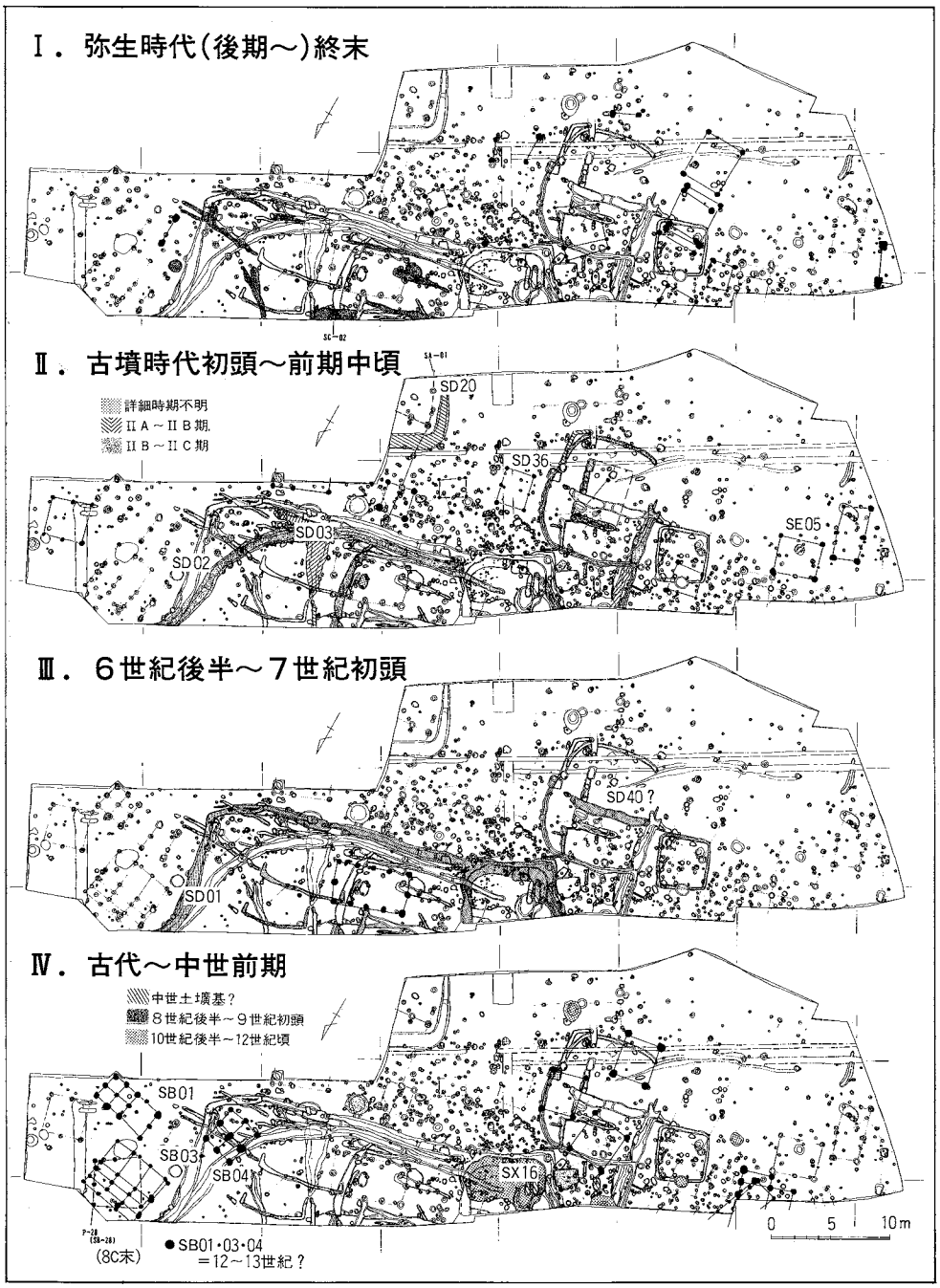


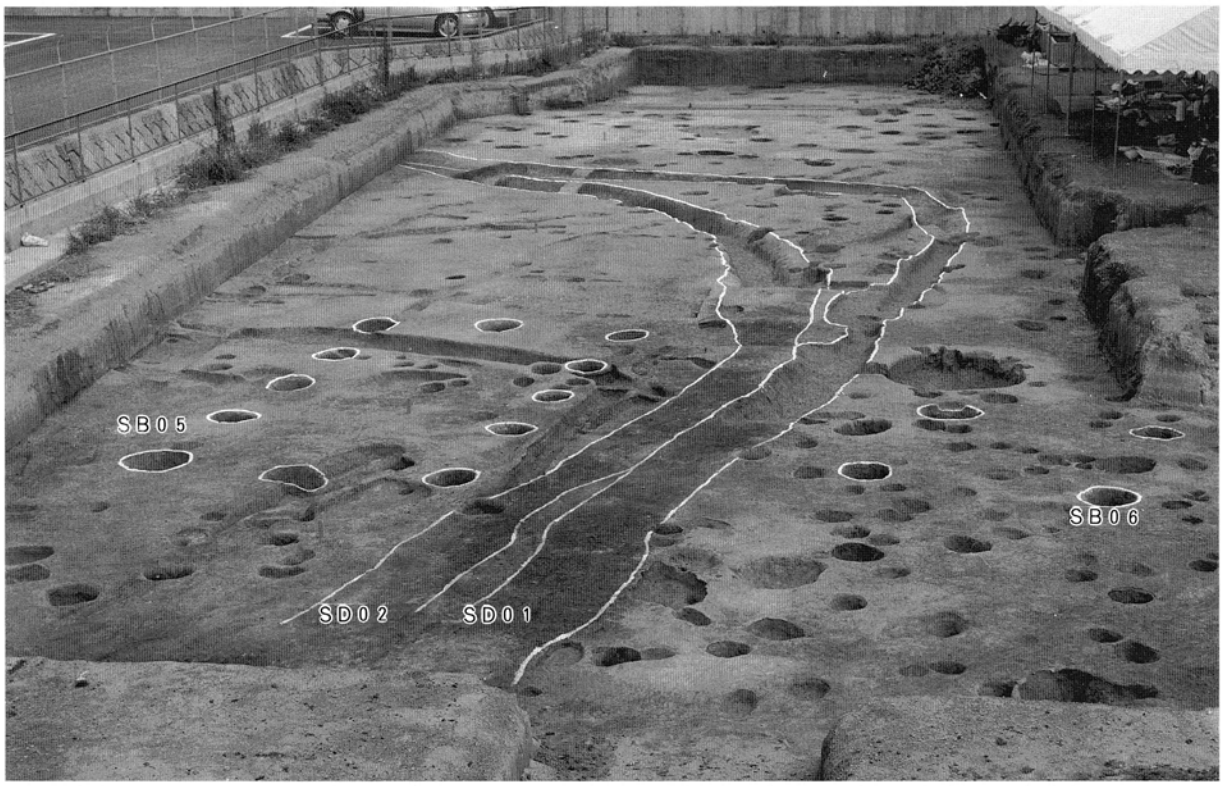
Fig.21　遺構変遷図（1/600）

Ⅳ　まとめ

以上の遺構・遺物の検討をもとに、Fig.21に遺構群の変遷を示した。なお弥生中期後半の遺構として、SD17・SB09・SK08などがあり、調査区中央の柱穴群に同時期の住居があるかもしれない。Ⅰ期からⅡ期とした弥生終末から古墳前期の時期が、本調査地点で最も遺構が多い時期である。Ⅲ期のSD01とSB05などは、上位階層の環溝を有する居宅であろう。Ⅳ期のうち、特に11～13世紀の遺構群は、輸入陶磁器が少ない点等から、高階層ではない、農民層の村落であると考えられる。

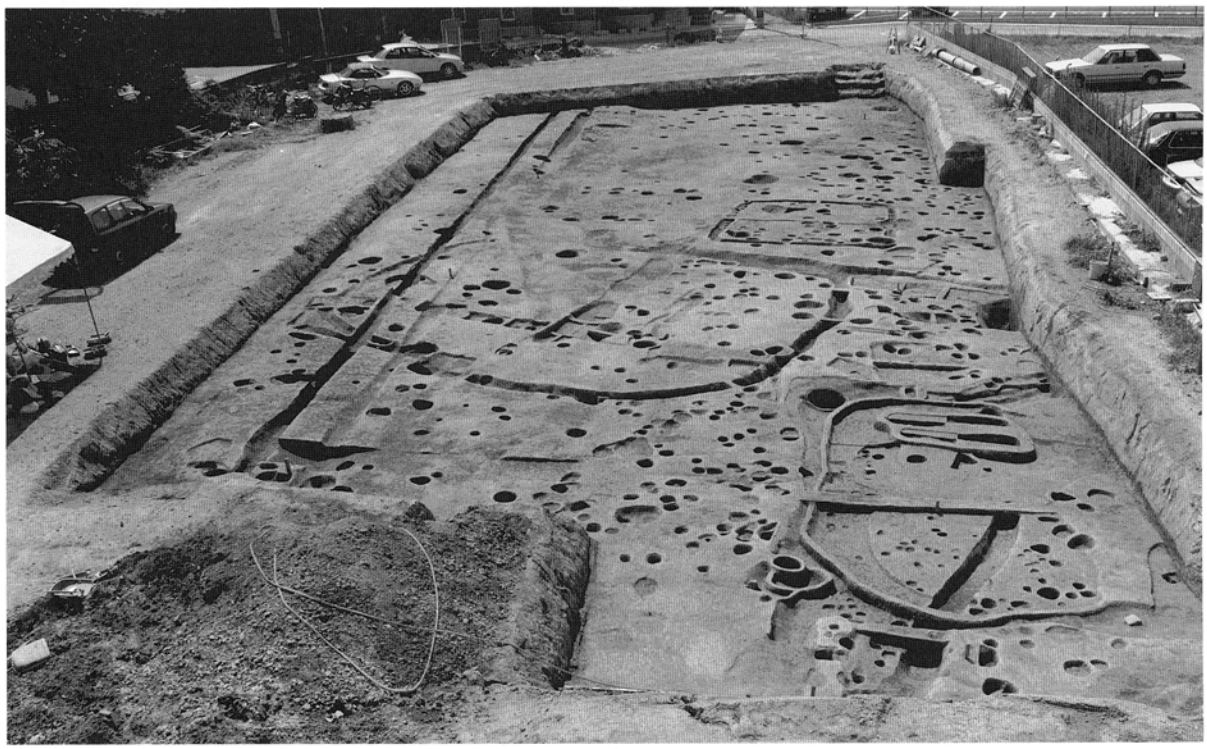
なお本報告では参考文献等の記述は割愛した。御寛恕されたい。

PLATE
図　　版

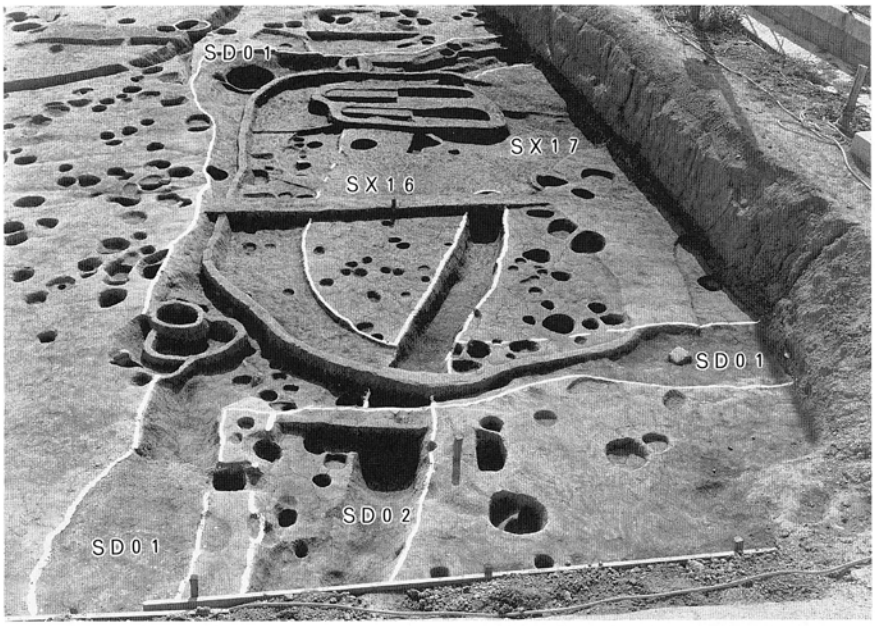


1．調査区東半近景（西から）

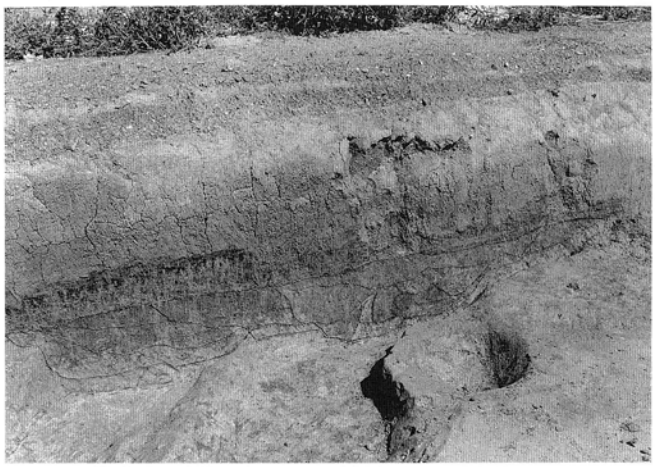
2．調査区東半全景（西から）



3．調査区西半全景（東から）



4．ＳＸ16･17、ＳＤ01－Ⅺ～ⅩⅣ区、ＳＤ02－Ⅹ･Ⅺ区（東から）

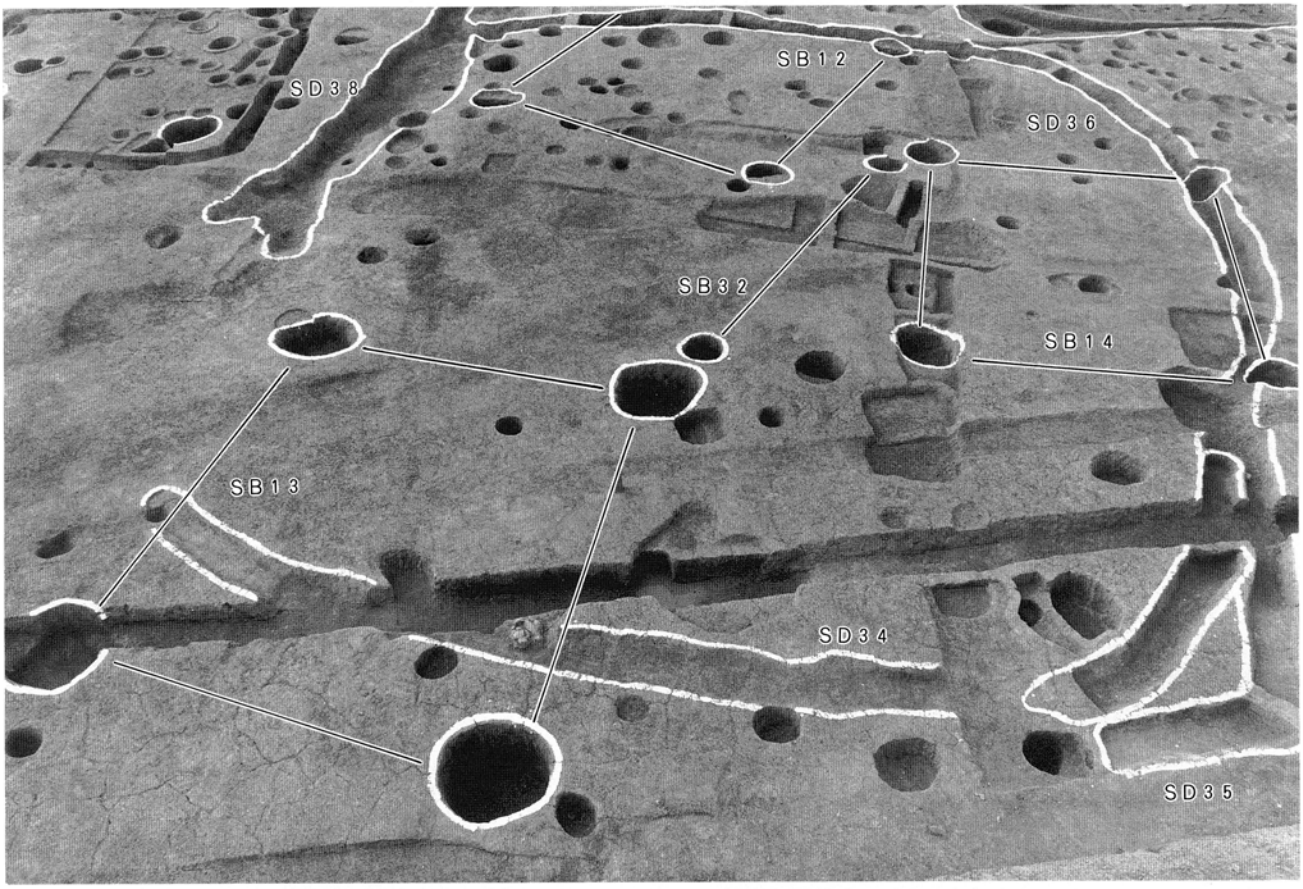


5．ＳＤ01･02－Ⅰ区北側土層（南から）

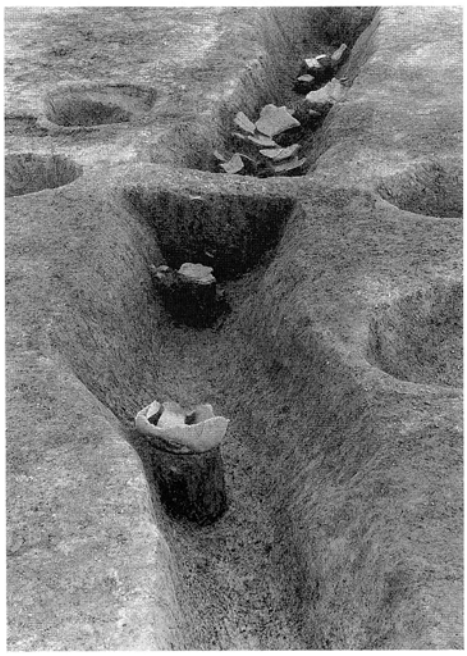
6．ＳＤ02－Ⅺ区西端土器出土状況（東から）

7．ＳＤ20全景（北から）

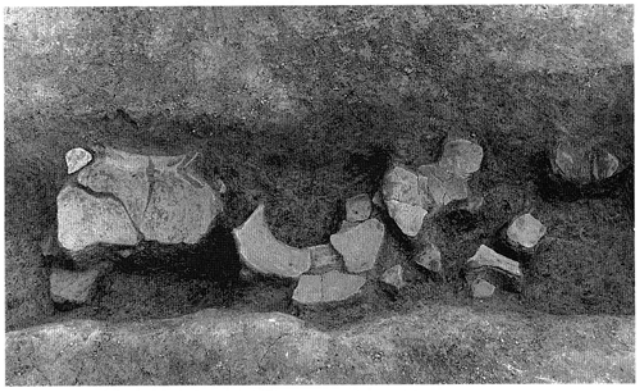
8．ＳＤ20コーナー部土器出土状況（北から）



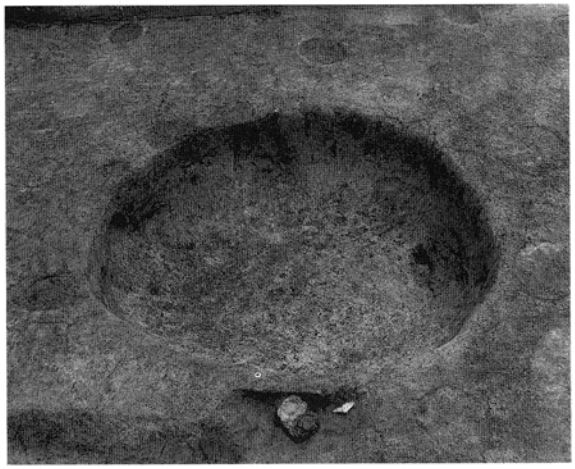
9. SD34・35・36・38、SB12・13・14・32(南から)



10. SD36－Ⅱ・Ⅲ区（手前がⅡ区）土器出土状況（西から）



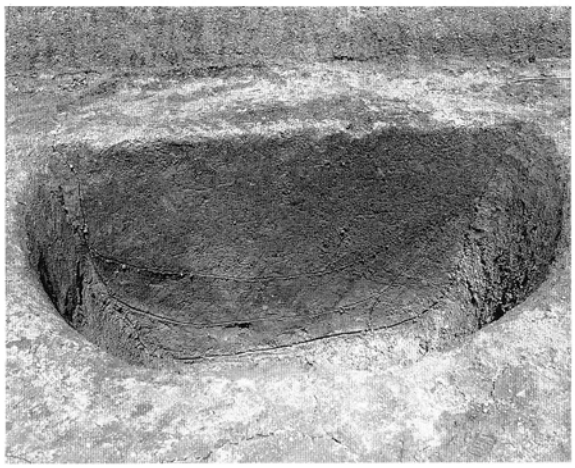
11. SD36－Ⅲ区土器出土状況（北から）



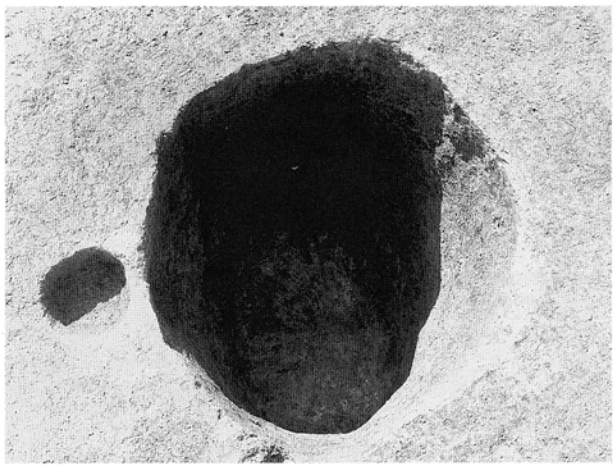
12. SK01完掘状況（北から）
※手前はSP287（SB09）

13. ＳＣ01全景（北から）

14. ＳＫ32(左)・ＳＫ31(右)（北から）

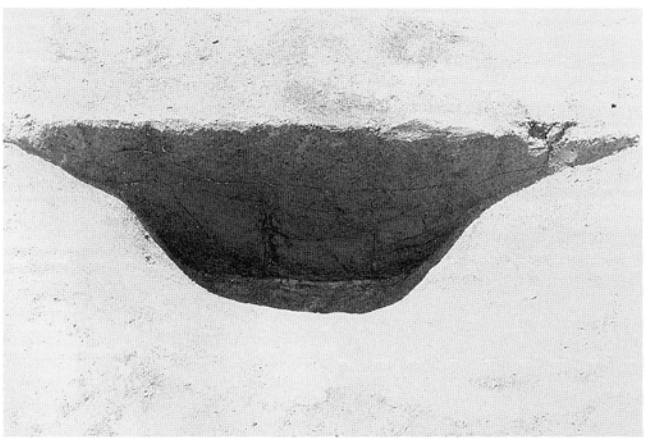


15. ＳＥ01土層状況（西から、左側がやや堀り足りない）

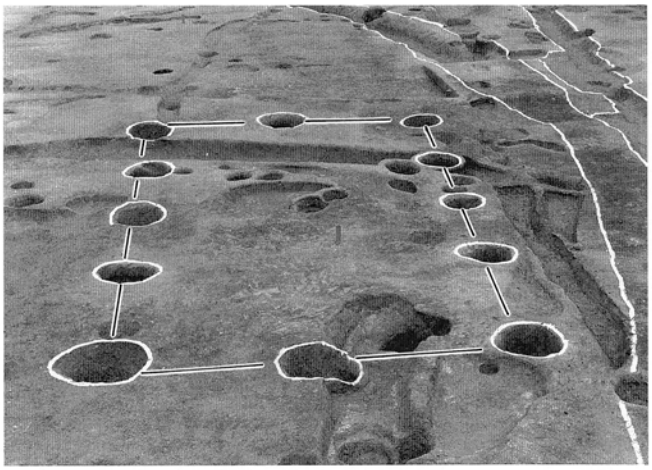


16. ＳＥ05完掘状況（東から）

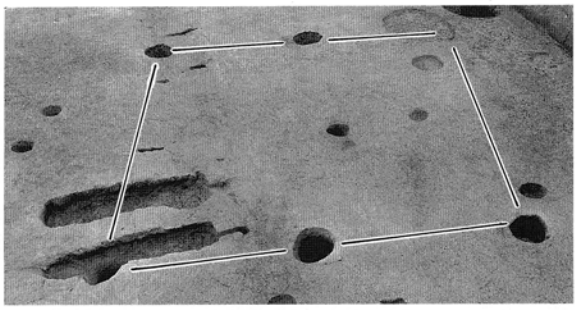
17. ＳＥ04土層状況（南から）



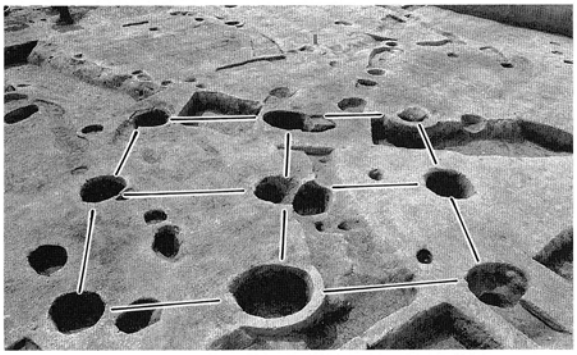
18. ＳＥ02土層状況（北から）



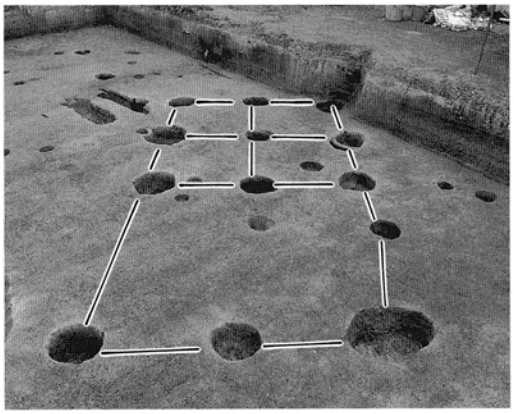
19. ＳＢ05全景（西から）



20. ＳＢ02全景（南から）

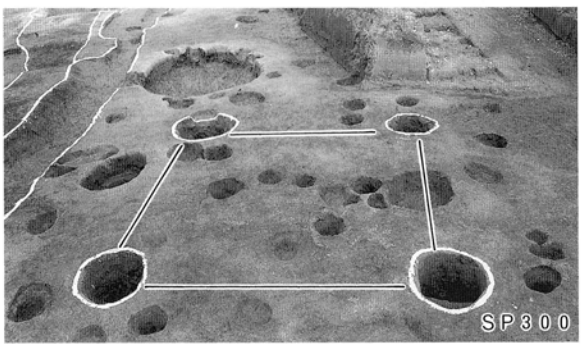


21. ＳＢ04全景（東から）

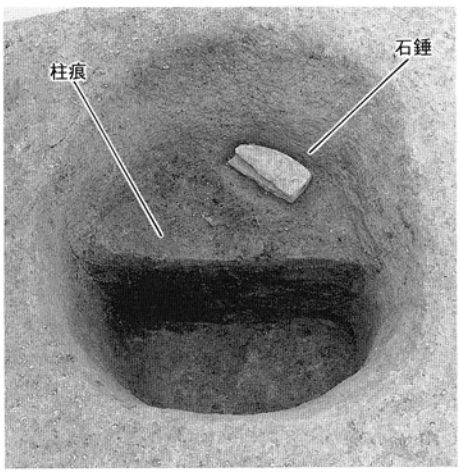


22. ＳＢ01全景（西から）

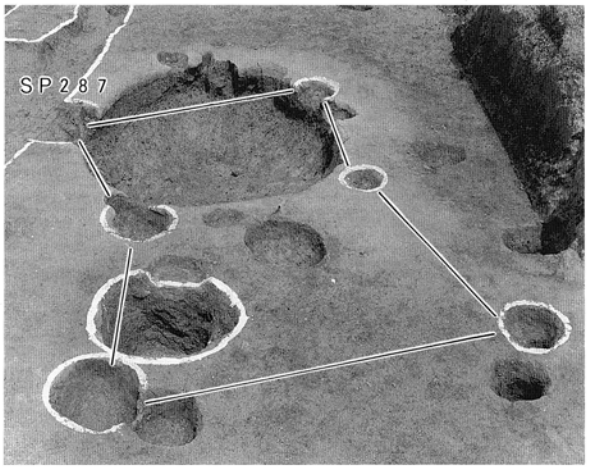
23. ＳＢ03全景（西から，右はＳＢ01）



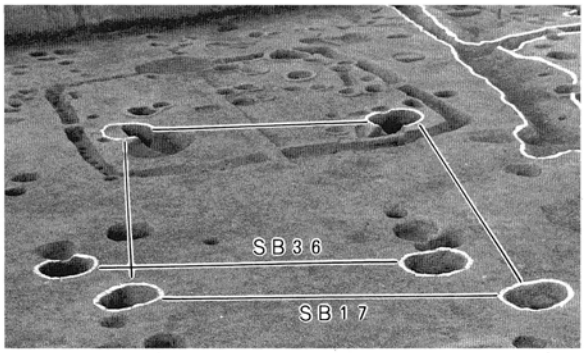
24. ＳＢ06全景（西から）



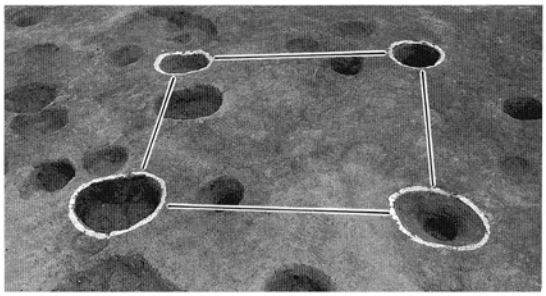
25. ＳＰ300（ＳＢ06）石錘出土状況（東から）



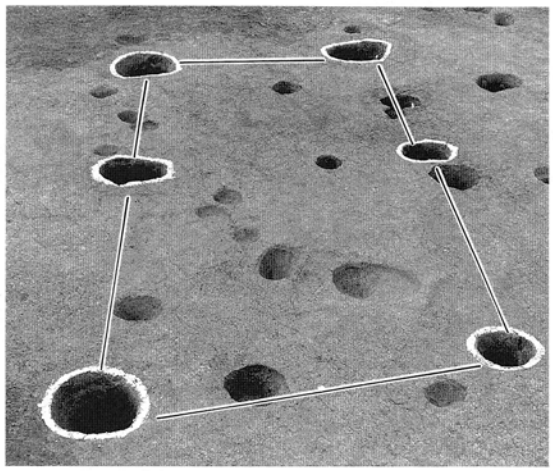
26. ＳＢ09全景(西から)



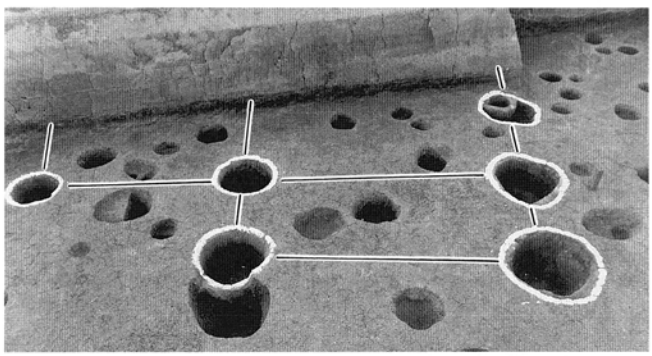
27. ＳＢ17、ＳＢ36？(南から)



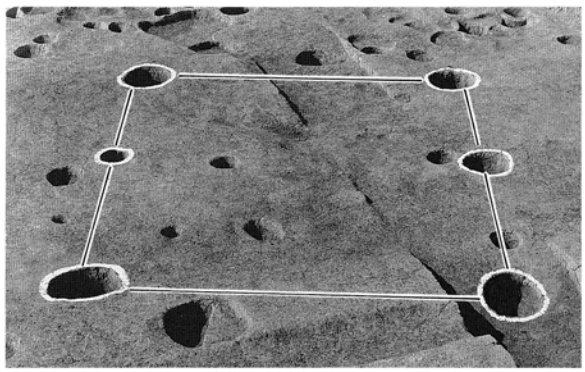
28. ＳＢ07全景(北西から)



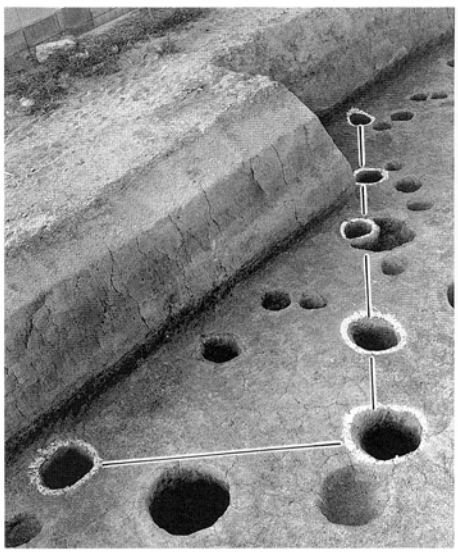
29. ＳＢ10全景(南から)



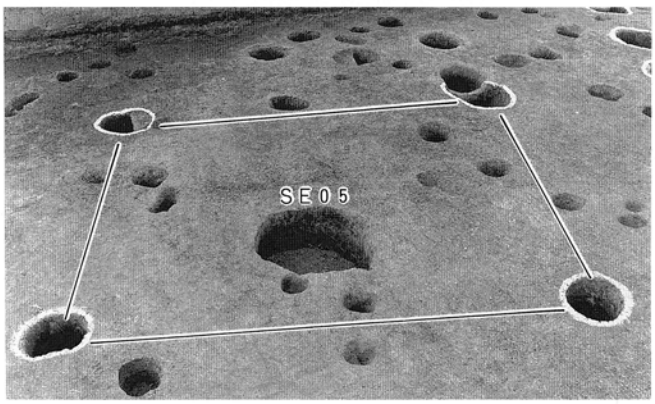
30. ＳＢ18(南から)



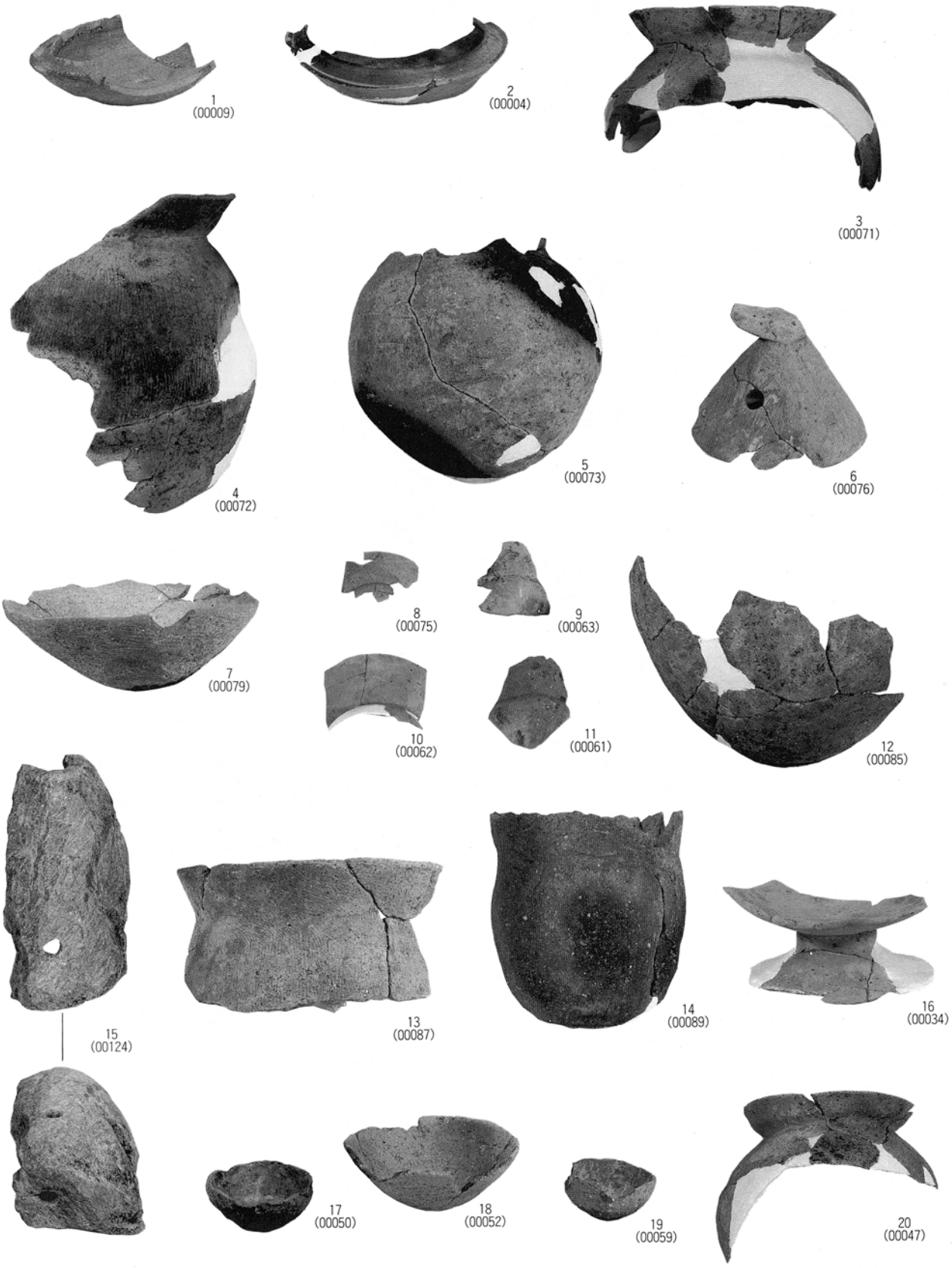
31. ＳＢ16全景(南から)



32. ＳＢ19(南西から)



33. ＳＢ11全景(南から、中央はＳＥ05)



1.SD01-Ⅸ区 2.SD01-Ⅷ区 3.SD36-Ⅲ区 4･5.SD36-Ⅱ区 6.SD35-Ⅱ区
7.SD38 8.SD34Ⅲ区 9.SD36-Ⅲ区 10.SD36-Ⅳ･Ⅴ区間 11.SD36-Ⅲ区
12～14.SD20 15.SP-300 16.SD03 17～19.SE05 20.SD02-Ⅺ区
( )内は登録番号

席田青木遺跡３
福岡市埋蔵文化財調査報告書第534集
平成９年（1997）３月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
印刷　福博綜合印刷株式会社